２０１０年度

事 業 報 告 書

TOMAKOMAI JC

The Power of Tomakomai

社団法人　苫小牧青年会議所

＜ 目　　　次 ＞

事　　業　　報　　告

理事長・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
専務理事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
年間活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
指導力室担当副理事長・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
総務室・交流室担当副理事長・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
地域政策室・広域制作室担当副理事長・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
事業室担当副理事長・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
組織改革会議・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
総務室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
総務委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
交流室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
交流委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
指導力室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
指導力開発委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
地域政策室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
地域政策委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
広域政策室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
広域政策委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
地域活力室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
地域力委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
生涯学習委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
アカデミー塾・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
公益社団法人　日本青年会議所　北海道ブロック協議会・・・・・・・・・・・・ 31
公益社団法人　日本青年会議所　７０８ＬＯＭサービス実践特別委員会・・・・ 32
公益社団法人　日本青年会議所　拡大委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
公益社団法人　日本青年会議所　北海道地区協議会　ＪＣ未来創造委員会・・・ 34
公益社団法人　日本青年会議所　北海道地区競技会　「地域のたから」創造委員会 35
公益社団法人　日本青年会議所　北海度地区協議会　広報渉外委員会・・・・・ 36
公益社団法人　日本青年会議所　北海道地区協議会　総務運営委員会・・・・・ 37
公益社団法人　日本青年会議所　北海道地区協議会　道南エリア運営会議・・・ 38
公益社団法人　日本青年会議所　北海道地区協議会　ＬＯＭ連携実践委員会・・ 39

そ　の　他

組織図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
入会資格審査・理事長選挙管理委員会・褒章審査構成員・・・・・・・・・・・・ 41
ＬＯＭ褒章結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
２０１０年度決算書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
会計監査報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

理事長事業報告

理事長　土屋　英樹

一年間を振り返り

【基本理念】

夢ある苫小牧の未来の為に
自分の心を見つめ芯を見つけ出し
新の道を創造し真になるひとの輪を拡げ
地域を創ろう

【ＬＯＭスローガン】

真苫小牧をＪＡＹＣＥＥから発信
～心から芯が新になり真へ～

【基本方針】

１．修練・奉仕・友情を率先して活動する
２．市民であることが誇りに思えるまちを市民と行政と協働して創造する
３．徳のあるひとの輪を拡げ真苫小牧に向かって積極的に行動する
４．公益性の高い運動を目指し青年会議所が誇りに思われる活動をする

苫小牧は北海道の中でも地域性に恵まれ、物流の拠点でもあり産業発展の可能性のある地域です。苫小牧だけの発展を考えた街づくりでは無く、近郊地域を含めた中で地域の独自性を生かした発展を考えなければなりません。苫小牧は政治や行政が考える街づくりの基盤が整い多くの技術やシステムが構築された反面、人々の意識に理解されない街づくりになっていると考えます。現在の苫小牧では、利他を思う情報発信が出来ていないので、一方的に環境を整え市民の参画を促した所で、街の発展と市民の意識の調和はとれません。我々青年会議所はその情報を一度精査し市民に発信する団体となり人々の気持ちに伝わる事業展開を行いました。市民に街づくりを意識してもらい、市民が主役になる街を創出する為にも市民の声が反映される市民参加の出来る街を作り、ニュートラルな団体である我々が、街の調整役や市民の代弁役となり利他を思う精神の人の繋がりによって苫小牧街の活性化に繋げる活動をおこないました。

人づくりから街づくりに繋がる様に、街や人を思える心のある人を増やすこと、そして、その人々の繋がりを促進することにより、苫小牧で安心して暮らし、生き甲斐を持ち、子供達の成長と教育を見守り、街の魅力と未来を市民一人ひとりが感じる事が出来る。苫小牧で生まれて良かった、この地域で暮らせて良かったと思えるのです。そんな街を行政や市民と共に青年会議所が考え発信し実現しなければいけません。我々自身が生きる素晴らしさの原点を考えられる大人として自らを育み、相手を理解し協力し合える力強い人を多く創り、市民と行政が協働して取り組む協働型社会の構築に繋げていけるよう活動してまいりました。

街に何が必要なのかを各々が考え自分を見つめる事を大切にし、ぶれない心を創出した展開が、街を変える確信を得る新たな精神を育んだ真の街づくりと繋がり、真苫小牧の創造となります。

我々の心から始まる街づくりの輪を拡げ、街の発展と市民の心を調和させ、これからの人たちにその輪を繋げ郷土愛溢れる明るい豊かな苫小牧を創りあげようと活動しました。

「企業を支える指導者を目指す」

我々は青年経済人であり、現代の社会の中で企業の一員としての役割を担っています。我々の企業を守ってくれる人がいるからこそ、我々は青年会議所運動を出来るのです。もし、その企業が不安定なものであれば、青年会議所運動に取り組むことなど到底できる訳もなく、仮にその企業が崩壊するようなことがあれば、明るい豊かな社会を築くどころか、地域社会に暗い影を落とすことになりかねません。我々は、この社会で運動を展開するＪＡＹＣＥＥとして、青年会議所運動に取り組むためにも、その間を守ってくれている人達のためにも企業経営をより強固なものにしなければなりません。それも、昨今問題となっている極めて利己的で背信的なやり方ではなく、古くから我が国で続く、道徳心というものを重視したやり方でなければならないと考えます。自分の立ち位置をしっかり考え、誠心誠意尽くしていくことが、より強固な企業づくりに繋がると思います。

また、我々は企業や地域社会において指導者としての役割を担っており、リーダーとは先導し率先して行動する者であります。それは即ち常に周りの人から背中を見られているということです。

組織を目的や目標に向かって導くためには、指導者の背中と信念が重要です。指導者自身が掲げた目的や目標を達成することを誰よりも強く信じていなければ、周りの人間はその目的や目標を達成できると信じて頑張ることなど出来ません。だからこそ、指導者としての真髄を極め、模範となる背中を見せられるよう徹底的に鍛えるべきなのです。信頼される真の指導者となるために。

○　実践内容

１．「発想力で時代を見る！！」

発想力とモチベーションの向上を図るために、北川邦弘先生をお招きし、ご講演いただきました。講演の内容は、脳の中にある地図を意識的に描き直すことで、自分の今までの記憶さえも替えることができ、それがポジティブに生きていく術に繋がること。また、出口戦略を立てること。それは、自分の人生の終点を考え、そこから逆算して人生設計を立てることが重要なのだという事も教えていただきました。

２．今こそ実践！『コーチング』　～ 会話のキャッチボール、できてますか？ ～

今回の例会では、メンバーに、「コーチングとは何か」「なぜコーチングが必要なのか」「コーチングの流れとテクニック」「具体的な場面に応じたコーチングの手法」について説明しました。コーチングの手法を実践的な内容で知ることで、それぞれが更に良き指導者を目指し、企業やチームの発展に繋げることを目的としました。

３．チーム力を付けよう！ ～ 人と人との相乗効果 ～

４章からなる構成とし、第一章「チームとは何か」第二章「チームの基本計画を書いてみよう」第三章「チームで進めるプロジェクト」第四章「チーム力を持続させるために」の内容でチーム力の必要性と組織運営の方法論を学びました。

４．「この時代を生きる指導者に何が必要か」

第 58 代日本ＪＣ会頭 安里繁信氏をお招きし、講演を行っていただきました。

今後この地域を支える若き経済人が、苦境に立たされている今の時代を生きる時、リーダーシップと自分の器を大きくする事の大切さをまなびました。この地域に住む経済人により、この地域の更なる発展に繋げたいと考えました。

「まつりは地域の人との協働」

地域やそこに来る人達の為に青年会議所は地域のまつりに関わっていく必要性があります。それは、様々な形でそのまつりに関わってくれている人達の喜ぶ顔が見たいから、そのまつりを観に来てくれた

人達の喜ぶ顔が見たいから、地域の子供達に喜んでもらいたいからです。
　決して、自分達の為だけではありません。我々は、自分達の為ではなく人の為にまつりに係わり、その人達の喜ぶ姿に喜びを感じるからこそ地域の人達に我々の想いと活力を伝えることが出来るのです。そして、青年会議所以外の人達とまつりという一つの事業に取り組むことによって、多くの気づきと学びを得ることができるのです。青年会議所の意見だけを一方的に発信しても、人は話を聞き入れてはくれないでしょう。 一緒に行動し考えていかなければなりません。
　我々は、まつりを通じて、この地域に人の為にという、人の輪を拡げようとしています。この地域に住むすべての人が人の為にという気持ちで日々の生活を送り、周りにいる人と関わることができれば、自ずとその地域は活力に溢れ明るい豊かな社会に繋がると考えました。

○　実践内容
１．苫小牧市中央公園にて第４４回とまこまいスケートまつりが開催され、私たち苫小牧青年会議所ではＴＯＭＡＫＯＭＡＩわんぱくスノーパラダイスと題して、多くの子供たちに、喜びや感動、生涯忘れることのない思い出を与え、夢と希望につなげ、その活動を通して市民に活力を発信することを目的として行いました。雪合戦大会も行い子供たちの無邪気な笑顔を見て、私達自身も活力を確認しましたし、記憶に残る思い出になったのではないかと思います。

２．8 月 6 日～8 日の 3 日間とまこまい港まつりが開催されました。私達苫小牧青年会議所は、アニマル&アクアパークと題して多くの市民の皆様に楽しんでいただきました。アニマルパークでは、ミニ動物園を開催して色々な動物に触れあっていただきました。ニシキヘビニは多くの皆様が、触ったり首に巻いたりと大変喜んでいただきました。子供たちは、陸ガメの甲羅に乗り陸ガメの力強さに驚いていました。アクアパークでは、初めての水鉄砲大会を開催しました。多くの小学生たちが白熱した試合を展開してくれました。お祭り期間中は天候にも恵まれ、多くの子供たちの無邪気な笑顔も見られ、私達自身今後の活動の活力となりました。

「苫小牧と近郊地域」
　日本の各地域で、街を活性化するための様々な取り組みが行われていますが、本来望んでいた成果が得られていないのが現状で、苫小牧も例外ではありません。どんなに良い手法を用いたとしても、その手法を用いる人によって、行き着く先は異なります。
　街を活性化するということは、経済的な豊かさや、生活環境の良さ、利便性の高さなど、条件を上げれば人によって異なり、経済的、物質的な要素も大切ではありますが、それ以上にここに住む人達の精神的な要素が重要であると考えます。安心して暮らし、生き甲斐を持ち、子供達の成長と教育を見守り、街の魅力を市民一人ひとりが感じられる街を、我々青年会議所が展開して行かなければならなく、まちづくりはひとづくりの精神で、この地域にそんな人の輪を拡げることが、我々が目指す明るい豊かな社会に繋がると考えます。地方分権時代に対応して、市民を主体とする自治を実現するために、重要な事項を明確に定める苫小牧市自治基本条例で「市民であることが誇りに思えるまち」を築くことをまちづくりの目標としており、市民自治によるまちづくりを我々もすすめ、市民、議会、市長等のまちづくりに関する役割や責務、更に市政運営の原則等についても明らかにし分かりやすく市民に発信したいと考えました。
　苫小牧は「市民であることが誇りに思えるまち」の創出を考えられる地域性であり可能性のある場所です。近郊地域の為にも苫小牧が今、地域の独自性を生かした観光や産業を創りださなければいけません。苫小牧が近郊地域の為に出来る事こそが、近郊地域の発展に繋がると考えました。

○　実践内容
１．利他のこころ～近郊地域の元気から苫小牧の未来が創造される～

3月23日(火)グランドホテルニュー王子にて例会を開催しました。
地域、団体の垣根を越えた青年団体による広域連携を模索する為、共に学び共に考え、方向性を共有する事を目的とし、厚真町、安平町、白老町、むかわ町の各商工会青年部の皆様及び北海道中小企業家同友会苫小牧支部の青年団体である友知会の皆様に参加頂きました。また、北海道庁を初めとする各地域関係諸団体の皆様にも参加頂きました。
　講師に、札幌国際大学准教授であると同時にNPO法人炭鉱の記憶推進事業団理事長、道央地域観光戦略会議会長他、多方面でご活躍の吉岡宏高先生に、これまでの実績や経験をベースとして、まさに現在動き出している広域連携の実例をご講演頂きました。先生のご講演内容に関し、多くの参加者から賞賛の声を頂きました。何より、各地青年団体の皆様の熱き想いを感じ、今後に繋がる大きな気付きを得ることが出来ました。また、ＮＨＫ様、北海道新聞社様、苫小牧民報社様、一耕社様、苫小牧ケーブルテレビ様に取材して頂くことが出来、オブザーバーの皆様のみならず多くの人々に苫小牧青年会議所活動の一端を発信できたものと考えます。

２．三無主義からの脱却　～「あっしには関わりの無ぇこって」は危機の始まり～
5月13日（木）グランドホテルニュー王子にて例会を開催しました。
まず始めに、ワークショップの体験を通して、市民参加の一手法を学び、今回新たに策定が予定されている「住民投票条例」について紹介し、単純に思える策定作業が、実は様々な問題を抱え、それらを様々な見地から議論されていると云うことを知り、またそれらの会議に我々も参加出来ると云うことを知りました。次に、無関心・無責任がこれからの市民自治にもたらす悪影響の一部分を理解し、市政への積極的参加を促しました。

３．相互理解から生まれる心の連携　～真の広域連携への一歩を踏み出そう！！～
本例会は、前回築き上げてきた厚真町、安平町、白老町、むかわ町の商工会青年部様との広域連携の基盤を活かし、各青年団体メンバーと関係諸団体の皆様全員が交流を深めると同時に、自ら考え自ら一歩を踏み出す事を目的として開催しました。
①４町で開催頂いた懇談会、②苫小牧ケーブルテレビ様との連携によるイベント等の相互広報、③ぐるとマップの活用方法等を発表しました。後半では、各商工会青年部部長とパネルディスカッションを会場の皆様にも参加頂く形式で行いました。パネリストの皆様は元より、会場の皆様にも非常に活発な議論をして頂き、広域連携に関し具体的な多数のアイディア、意見を頂く事が出来ました。丸テーブルに各団体が混ざる形の席順にした事や、例会後の懇親会でも同じメンバーで座って頂く工夫をした事で活発な議論が展開され、今後の活動に通ずる人と人との繋がりを深める事が出来ました。

４．今すぐ実行！市民参加のまちづくり～物言えばこのマチは変わる～
「市民参加への無関心の払拭」をテーマとする例会を主催し、市民参加制度の重要性と無関心がもたらす問題点を伝えました。しかし、苫小牧市民が有する市民参加制度への関心度は、非常に低い「危機的」な状況にあり、このままでは、市民参加制度や地方自治の仕組みが機能しないことが懸念されます。この状況を改善するため、市政や市民生活の問題の解決には、市民自らの議論やアクションが重要であること、そしてその手法として市民参加制度があることを市民に対して強く発信し、これらを市民に認識してもらう必要があると考え、今回は、一般にも開放する形式で、メンバーに案内するだけではなく、いろいろな媒体を使って周知につとめました。市民参加条例や市民活動の推進は、どちらかと言えば敷居が高く感じられますが、当日のメンバーや一般の方々は興味深そうに話を聞かれていました。

５．「苫小牧市自治基本条例」「市民参加条例」の制定施行に伴い青年会議所会員での学習及び苫小牧

市民への発信を実施してきました。市民１０００人に意識調査のアンケートを取りまとめた資料を苫小牧市役所へ提出しました。現在の多くの市民が身近な部分に問題意識を持ち、各々に解決を模索する中から市政への関心、市民参加の意識が高揚されます。

６．東胆振の情報サイト「ぐるとマップ」をホームページに掲載しました。又、東胆振秋のスイーツ「スタンプラリー」等、１市４町の協同による事業を行いました。各町の商工会青年部と連携を図り事業を開催した事は初めてであり、東胆振を一つの地域と考え、交流人口の増加を促し、地域の人には近郊地域を知ってもらえる良い事業だったと考えます。これからも近郊地域との交流を図り新しい東胆振の可能性を発信する必要があると考えます。

「ひとづくりからまちづくり」

我々が育った時代は、親や先輩に押さえつけられて育ってきました。その時は、憤りを感じ、理不尽であると思いました。しかしながら、自分自身がその立場になってみると、親や先輩に言われたことが良く分かります。昨今は、叱らないおとなや、叱られないこどもが増えているように思います。押さえつけたり、押さえつけられたりすることが少なくなり、我慢や辛抱をすることが少なくなった結果、目を覆い、耳を疑うような事件が発生し、以前のこの国とは違った問題が社会で起こっているのではないでしょうか。

以前のこの国は、年長者が年少者を愛しみ、年少者が年長者を敬う長幼の序を重んじることによって礼節を身に着け、身に着けた礼節を尽くして互いを認め合い、互いを認めるからこそ我慢や辛抱を積み重ねて目に見えぬ徳を積み、その結果として道徳心が育まれ、利他の精神に溢れた国であったのだと感じています。今こそ、我々自身が徳のあるひととなり、古くから尊ばれてきた日本の精神文化をこの地域を支えてくれる次の世代だけでなく、我々と同じ世代にもしっかりと伝え、この地域に徳のあるひとの輪を拡げることが明るい豊かな社会を築くと考えます。

○　実践内容

１．大人が変れば子供も変る。学ぼう大人の背中。～子供達のために　JAYCEE がすべきこと。～

子供に示すべき大人の背中を持った大人が少なくなっていると考え、大人の背中について学ぶ事を目的に開催しました。子供は様々な場面で私達大人の言動やしぐさなどを無意識のうちに手本とし、自らの生きる力を育んでいます。私達は常に見られているという事を認識し、自らが実践できる背中を学び考える事は子供にとって大切なのです。大人の背中は一度の学びで身につくものではありませんが、学びと実践の繰り返しが、私達の背中を真の大人の背中へと導くと考えました。私達 JAYCEE が率先して大人の背中を学び実践し続ける事で、その姿勢を他の大人に伝えていきたいと思います。

２．「チャレンジ探検隊」～つくろう友達・学ぼう自然・歩いてみよう in アルテン～

8 月 21～22 日に苫小牧市内の小学生 30 人と共に苫小牧オートリゾートアルテンでキャンプを行いました。最初のうちは子供たちも緊張していましたが、時間が経つにつれ子供たちの緊張もほぐれ皆で楽しみながらオリエンテーリングを行いました。夜には、星空を観測してキャンプファイアーを行いました。あいにく空が曇っていたため星空は見えませんでしたが、キャンプファイアーで大いに盛り上がりました。二日目は、オリエンテーリングのときに拾ってきた葉っぱや小枝を使って、写真立てなどを作りました。作品には子供たちの個性が出てみんな上手に作っていました。最後に班ごとでミーティングを行い今回のキャンプで思い出に残ったこと、楽しかったこと、などを模造紙にまとめて、迎えに来ていただいた家族の前で発表しました。親御さんたちもわが子の発表を聞いて子供の成長を感じ取っていただけたと思います。

今回のキャンプを通じて子供たちは自然体験、社会体験、生活体験、を経験しました。子供たちに

は今回の体験を生かして大きく成長して欲しいと願います。私たち大人も、子供たちから多くのことを学びました。今回のキャンプは私達にも良い思い出になりました。

結びに

私は、青年会議所の運動は、原理原則に基づいて物事の道理や筋道をわきまえた運動を展開すべきであると考えます。その運動のあり方が、仲間や地域に受け入れられるのであり、そのあり方を逸脱した運動は青年会議所の運動には不相応だと言えるでしょう。

しかし、原理原則に基づいて一定の議論を重ねて日々の運動を展開しても、我々の運動の本質は理論や理屈も大切ですが、何よりも心が必要です。原理原則に基づいて物事の道理や筋道を重んじることは大切ですが、相手の立場や人の気持ちをおし量ることの方がもっと大切です。何故なら、人は理屈ではなく、心で動いてくれるものです。だからこそ、我々の運動には心でうごく理由が必要なのです。我々はＪＡＹＣＥＥである前に、ひとりの人なのです。そして、青年会議所ほど人というものが何であるかということを知ることができる組織は無いと信じています。明るい豊かな社会を築くために、人を残して社会に貢献しようと運動している青年会議所運動は今だけを見れば費用対効果とは程遠いものですが、我々の長い人生を考えた時に、４０歳までという限られた時間の中でしかできないものであり、人というものが何であるかということを体感できる、何ものにも代えがたい貴重な経験と時間であります。

そして、理屈や形式だけでこの運動に取り組めば人を知ることなど到底できる訳もなく、単なる時間のムダとなるでしょう。この運動に真剣に、全力で取り組むからこそ、自ずと人を知ることができ、単なる時間のムダではなく、大いなる価値ある時間になるのです。

青年会議所運動に取り組み価値ある時間を共に過ごさせて頂きました。

専務理事　事業報告

専務理事　伊部　尚宏

一年間を振り返り

本年度、（社）苫小牧青年会議所は土屋理事長が掲げる方針及びスローガン「真苫小牧をＪＡＹＣＥＥから発信」を基に１年会活動してまいりました。その中で専務理事として最大の役割は土屋理事長をトップとする今年度のＬＯＭ運営を円滑に進めることでした。ＬＯＭ運営と一言でいってもその業務は多岐にわたります。三役会や理事会、各種諸会議の運営は勿論のこと、ＬＯＭの予算及び事務局の管理、日本ＪＣ並びに各関係諸団体との情報の受発信及び渉外活動などが主な内容ですが、全てはその年その年の理事長方針を最大限具現化していくためであり、今年度、専務理事として職務を遂行することが出来た１年となりました。

予定者段階から約１年半の間、専務理事そして三役の一員としてＬＯＭ全体と対外的な活動を通して多くの気付きを得ることが出来ました。その中でもこの青年会議所という団体の素晴らしさを改めて感じることが自分自身１年半の活動の成果ではなかったかと思います。この団体は、人から学びを待っていては決して自己の成長には繋がっていきません。自分自身が主体性を持って活動をしていけばこそ、多くの学びや、多くの仲間、そして多くの財産を得ることが出来るのです。活動に割ける時間的な差は会員によって様々ですが、ＪＣ活動の時間が多ければ良くて、短ければ悪いというものでもないのです。大切なのは、参加する例会や事業、委員会等一つひとつの活動に主体性を持ち真摯に活動していくことだと思います。自分の担当する例会や事業は勿論ですが、担当以外の例会や事業そして他ＬＯＭ、日本ＪＣ等の事業に主体的・積極的に関わって活動するメンバーが一人でも増やす事こそが今後の（社）苫小牧青年会議所の成長、そして我々の街苫小牧の発展に繋がっていくと確信しています。

活動の最中は忙しかったり大変な事があったりしましたが、終わってしまえば、楽しかったり良かったと心から感じています。それは多くの人の支えがあったからだと思います。こうした毎年の繰り返しがＪＣであり、この組織の良さだと思います。本年度、（社）苫小牧青年会議所運動の方向性を導いてくれた副理事長の皆様、運動の中核となって活動して頂いた、委員長を始めとする理事者の皆様、そして各長を支えて頂いた全てのメンバーに感謝申し上げると共に自身の成長の機会を与えてくれた土屋理事長にお礼申し上げます。

社団法人苫小牧青年会議所　年間活動報告

月	日	LOM内行事	LOM外行事
1	6	事務局開き	
		樽前山神社参拝	
			北海道新聞社　新年交礼会
		第1回三役会	
	7		苫小牧商工会議所　新年交礼会
			(社)白老青年会議所　新年交礼会
	12	第1回理事会	
	13		(社)札幌青年会議所　新年交礼会
			(社)浦河青年会議所　新年交礼会
	14	(社)苫小牧青年会議所　新年交礼会	
		(社)苫小牧青年会議所　定時総会	
	15		(社)千歳青年会議所　新年交礼会
	16		日高中部青年会議所　新年交礼会
	19	第2回三役会	
	22-24		京都会議
	26	第2回理事会	
	27	1月第一例会(三役担当)	
	30		苫小牧ボランティア連絡協議会　新年交礼会
	31	とまこまいスケートまつり　全体設営	
2	4	第3回三役会	
	6-7	とまこまいスケートまつり	
	12	第3回理事会	
	18	第4回三役会	
	23	第4回理事会	
	25	2月第一例会(指導力開発委員会担当)	
	27		道南エリア　アカデミー塾開校式
	28		北海道地区協議会　会員会議所会議
3	4	第5回三役会	
	6	札幌JCアイスホッケー交流戦	
	11	第5回理事会	
	14	八戸JCアイスホッケー交流戦	
	18	第6回三役会	
	21		(社)日本青年会議所　総会
	23	3月第一例会(広域政策委員会担当)	
	25	第6回理事会	
	27		道南エリア会議(伊達市)
4	2	第7回三役会	
	8	第7回理事会	
	11		北海道地区協議会　会員会議所会議(北見市)
	13	4月第一例会(生涯学習委員会担当)	
	15	第8回三役会	
	19	じゃがいもクラブ総会	
	22	第8回理事会	
	27	第9回三役会	
5	6	第9回理事会	
	13	5月第一例会(地域政策委員会担当)	
	15-16		道南エリアスポーツ大会(森町)
	20	第10回三役会	
	27	第10回理事会	
6	3	第11回三役会	
	8	第11回理事会	
	10	6月第一例会(アカデミー塾担当)	
	17	第12回三役会	
	19		倶知安青年会議所　50周年式典
	22	6月第二例会(指導力開発委員会担当9	
	24	第12回理事会	
	27		北海道JCリーグ(伊達市大滝区)
	30	後期新入会員　顔合わせ	
7	1	第13回三役会	
	4		北海道地区大会事務所開き(留萌市)
	13	第13回理事会	
		(社)苫小牧青年会議所　定時総会	
	10		北海道地区協議会　会員会議所会議(根室市)
	11		北方領土返還要求運動現地大会(根室市)
	13	第14回三役会	
	20	OB交流会	
	22	第14回理事会	
	24-25		サマーコンファレンス(横浜市)
	27	7月第一例会(広域政策委員会担当)	
	29	第15回三役会	

月	日	LOM内行事	LOM外行事
8	1	とまこまい港まつり　全体設営	
	5	第15回理事会	
	6-8	とまこま港まつり	
	7		道南エリア会議（浦河町）
	8		（社）登別室蘭青年会議所　5周年式典
	12	第16回三役会	
	19	第16回理事会	
	21-22	青少年育成事業チャレンジ探検隊	
	22		森青年会議所　45周年式典
	24	8月第一例会（地域政策委員会担当）	
	26	第17回三役会	
	28		（社）余市青年会議所　50周年式典
9	2	第17回理事会	
	4		（社）函館青年会議所　60周年式典
	9	第18回三役会	
	10-12	ラリージャパン（苫小牧市）	北海道地区大会（留萌市）
	11	広域連携事業　鉄道遺産メモリアルツアー（安平町）	
	15	大黒摩季ドリームコンサート	
	16	第18回理事会	
	22	9月第一例会（指導力開発委員会担当）	
	26	八戸JCじゃがいもクラブ交流戦（八戸市）	
	28	第19回三役会	
10	1-2		日本JC全国大会（小田原市）
	7	第19回理事会	
	12		小樽JC記念事業（小樽市）
	14	第20回三役会	
	17		北海道じゃがいもクラブ対抗戦（苫小牧市）
	21	第20回理事会	
	23	道南エリア会議（洞爺湖町）	
	26		10月第一例会（アカデミー塾担当）
	28	第21回三役会	
	29	指導力開発事業（安里繁信氏講演会）	
11	1-6		JCI世界会議　大阪大会（大阪市）
	2	第21回理事会	
	11	第22回三役会	
	13		（社）旭川青年会議所　60周年式典
	16	11月第一例会（総務委員会担当）	
	18	第22回理事会	
	25	第23回三役会	
	27		北海道地区協議会　会員会議所会議（札幌市）
12	2	第23回理事会	
		（社）苫小牧青年会議所　定時総会	
	7	卒業式	
	9	第24回三役会	
	10		苫小牧青年会議所OB会　総会
	14	ボーリング同好会　総会	
	16	第24回理事会	
	21	アイスホッケー同好会　総会	
	28	事務局納め	

副理事長　事業報告

指導力室担当
副理事長　笹嶋　隆廣

一年間を振り返り

土屋理事長を支え、あっという間の一年でしたが、入会してから10年目の年に、初めての三役、副理事長として過ごすことになり、今までになく心の引き締まると共に有意義な一年間を過ごさせて頂きました。「青年会議所は甘っちょろい友情の場ではなく、人間修練の道場だった」という、今年度第一号の機関誌Ｗｅ　Ｂｅｌｉｅｖｅに掲載された、第８代日本ＪＣ会頭、千宗室先輩の重い一言が強く私の心を刺激し、今年度、副理事長として自らにもメンバー全員にも厳しい一年にすべく活動しましたが、時間に追われる日々が続き、厳しさよりも、こなさなくてはいけないという義務感が先立っていたかもしれません。せっかく入会して活動している青年会議所活動で、副理事長として今後の自分自身のためにも、メンバー全員のためにも、もっと厳しさがあって然るべきだったのではないか、やりきった感と同じくらい、もっとできたのではないかという気持ちが多少残っているのも否めません。

私は青年会議所に入会以来、人間力開発に携わり続け、その集大成として今年度副理事長として指導力室、指導力開発委員会を担当しました。千歳青年会議所との合同例会を含めて３回の例会、安里直前会頭をお呼びしての講演会と、例会、事業の回数としてはもっとできたかとも思いますが、各例会テーマを変え、一年を通じて流れのある活動を行えたものと考えます。ここ数年、レクチャーを行ってこなかった３分間スピーチでしたが、入会翌年の2001年研修委員会時代に担当した「5分間プレゼンテーションの事前講習」を、当時の坂本副理事長に厳しく指導を受けたことを基に、今年度は指導力開発委員会に対し、私が受けた以上に厳しい「3 分間スピーチのレクチャーのためのレクチャー」を行い、委員会メンバーがスピーチ担当委員会に出前講座として実践していくうちに、全くの素人だったメンバーがスピーカーに対し適切な指導やアドバイスをできるようになっていったようで、例会当日の３分間スピーチでは全員が予想以上のスピーチを行えたと思います。出前レクチャーを快く受けて頂き、ご参加頂いた各委員会の皆様にも感謝申し上げるとともに、例会時のスピーチに限らず、スピーチの組み立てや話し方など、メンバー全員が今後様々な場面で実践活用、さらにもうワンステップ上のスピーチができるようになる内容だったと思います。

佐藤委員長はじめ指導力開発委員会メンバーに厳しい指導で恐かったとも言われましたが、結果として何よりも委員会メンバーの成長につながったものと思いますし、吉本室長をはじめ委員会メンバー全員の素質の高さと努力に敬意を表します。今後も苫小牧青年会議所が、様々な事業等を通して友情を確かめるばかりでなく、このような人間力、指導力開発の流れを絶やすことなくメンバーの自己研鑽の場、人間修練の道場であり続けることを心から願います。

副理事長事業報告

総務室　交流室担当
副理事長　米田　嘉慎

一年間を振り返り

本年度は三役として副理事長方針を設けず理事長方針を各室、委員会にダイレクトに理事長の考え方を伝え意識の統一を図りました。各ラインが迷わぬように常に理事長の考えを感じとりラインに落として苫小牧青年会議所が永久的に活動を続けるために更に委員会が更なる進化を遂げるためには自ら各室の一歩先で行動をし、努力を惜しまず高みを目指す団体として自分が経験者であることを踏まえ、背中を見せ続ける「心」の活動が重要でありました。

その中、室の動きとして総務室には「ＬＯＭの動きがメンバーにわかる」設え、そして、交流室には「メンバーの顔がわかる」設えに重きを置き更には今までには無い更に進化した活動と公益法人を見据えた経費の削減を目指し「芯」となる活動していただきました。

総務室は今までメンバーなどに配布するものを調査し時代にあった回覧方法を確立し、またホームページの更新頻度を早め常にＬＯＭの動きがわかるような活動をしていただきました。室の事業費についても昨年から見ますとメンバーの減少もありますが約 20%減の予算となっております。総務室はたとえで「縁の下の力持ち」と表現され人から見えないところでの作業が大半でありますが結果として総務室が「新」への一歩となる活動と考えます。

交流室についても同様であり理事長のお披露目から卒業式にいたるまで「段取り八分」という表現で会の運営をいたすところを「段取り９分」まで構築し、後はメンバーがおのずと動ける設えを致しました。また、メンバー間の交流という点においても懇親会の運営、バスでのメンバー輸送など新しい試みを通して人とのつながり、そして友情が重要である、人が交流するためにはまず、自らが行動しなければならないという再確認をさせていただき、まさにメンバーの顔がわかる運営となりました。そして、これから先ＬＯＭの文化となりうる法被を作製し好評を得ており更なる「新」への一歩だと考えます。

上記のように活動の一端を担い､｢真｣の苫小牧青年会議所の活動を本年度の副理事長総評と致します。

副理事長事業報告

地域政策室・広域政策室担当
副理事長　藤田　健次郎

一年間を振り返り

本年度、地域政策及び広域政策の２室を副理事長として担当致しました。政策に関わる担当ラインは、将来に向かって苫小牧を明るい豊かなまちにする事を担いとして設置されました。日本の国家運営は、繁栄を長らく牽引した中央集権の構図から、地方分権に変化しつつあります。自主自立の地域運営のために、今後は各地域の得意分野や特性を活かす事が必須となります。没個性化した地域では、更なる発展が見込めないばかりか、周辺地域からも必要とされない事態を招きます。住民が愛着を持ち、自ら能動的にまちづくりに取り組むまち、かつ周辺地域からも必要とされるまちが、明るい豊かな苫小牧のあるべき将来像であると考えます。この将来像に向け、地域政策は、苫小牧を内側から発展させる視点で、市政との関わりを中心に活動しました。広域政策は、苫小牧を外側から発展させる視点で、近郊地域との連携を中心に活動しました。異なる２室の活動を通じ、地域の大いなる可能性を見出す事が出来ました。事業の実施内容は、各室及び各委員会にて報告します。以下は活動から得られた考察を報告します。

このまちを更なる発展に導くためには、まず変革の出発点としての現状認識が欠かせません。内側からの主観的な分析と、外側からの客観的な分析が必要となります。如何に地方分権といえども、それぞれのまちの力には限界があるからです。自らのまちで解決する問題と、周辺地域との相互連携にて解決する問題を見極めなければなりません。主観的分析では、苫小牧の強みと弱みを明確とし、強みを伸ばす方策を実施すべきと考えます。客観的分析では、苫小牧が他地域に対して、自らの強みで出来る貢献と、他地域から補完して頂く弱みについて、周辺地域と協働で模索する必要があろうと考えます。市政運営の仕組みづくりや、行政への市民参加などの問題は、自助努力にて改善を図らねばなりません。その他、例えば、公共インフラの効率化や広域医療の問題、広域地域で取り組む商業振興などの分野では、広域連携により限られたまちの力を有効活用できるものと考えます。周辺地域とお互いに助け合い、それぞれ愛すべきふるさとの発展に尽くす事が出来れば、日本はまた新たな局面に進めるものと思います。

国際競争の場においても、自国で出来る事と他国との連携で可能になる事の双方が存在します。国際間競争の中では、地域における広域連携のように容易に利害一意しないものの、自国の優位性ある分野がなければ交渉の舞台にも上がる事が出来ない点で一致しています。日本の優位性をリードしてきたのは、ひとの力でした。この先も、日本の優位性はひとに負うものが大きいはずです。地域で生まれ、中央で育ったひとが活躍する時代が長く続きましたが、これからは、地域に生まれ、地域で育つ人財が、日本を支えるはずです。地域のまちづくりもひとが支えます。今後は人財育成も地域での政策の重要な課題になってきます。しくみなどのハードの構築もさることながら、人財育成のソフト面も日本を支える地域の役割となります。一年の活動を通じて、まちづくりからひとづくりの重要さ、地域を考える事から世界を考える必要に気付く事が出来ました。この貴重な経験を、確実に後進にも伝える事とします。

また、副理事長は、理事長の職務全体の補佐もその役割となります。ライン担当役員としての職務も、理事長を代理して行っているものです。その他の役割については、全ての事業等について、その実施内容や実施意義について意見具申する事や、理事長に代理しての公職への就任、理事長不在の場合に、代行順位に従ってその職務を代行する事などがあります。上記報告にある通り、ライン担当役員としての職務以外については、意見具申と公職への就任、若干の庶務の補佐を実施しました。理事長を代行する職務については、理事長にて全ての職務を遂行されたため、本文書に特段報告すべき点はありません。

副理事長　事業報告

事業室担当
副理事長　矢部　大観

一年間の活動を振り返り

本年度は、理事長、三役のメンバーと共に、真苫小牧をＪＡＹＣＥＥから発信するため、活動してまいりました。事業室を担当し２月のスケートまつり、８月の港まつり、９月の青少年育成事業など苫小牧市民、子供達と多く接する場所での活動となりました。

スケートまつりでは昨年の１１月を皮切りにスケートまつり常設委員会に理事長の代役として参加し、スケートまつり全体の概要を常設委員の方々と調整し、スケートまつり実行委員会に反映させるポジションに付かせていただきました。常設委員会の内容こそは例年に沿った事項も多く見られましたが、前年度に出た反省事項を重要しする場面あり、年々様変わりするお祭り知ることが出来ました。港まつりも同様に常設委員会を経て実行委員会へと一連の流れを経験し、さらにパレード協賛行事部長を経験することができました。パレード協賛行事部の活動は、パレード全般の概要と前年度の引継ぎ事項、並びに問題点を検討し、おまつり当日に反映させる作業をさせていただきました。その中でも思い出に残るのは､パレード審査委員として苫小牧ビックジョイと苫小牧エガオ前にてパレードを審査したことです。今年のお祭りは晴天に恵まれ、尚且つ気温も高めに推移する過酷な条件化の中、日ごろより練習した成果を沿道で応援する市民に向けて元気に発信するパレード参加者を審査して、苫小牧市民の元気と活力感じる事が出来、審査委員として苫小牧潜在したパワーに感動した事を覚えております。

青少年育成事業では、苫小牧錦大沼を舞台に苫小牧の未来を担う子供達とチャレンジ探検隊と題し、自然型体験学習を行いました。子供の生きる力の育成を分析、親や学校できない事を見出し、地域の大人が出来る役割を認識する事業でしたが、終始、参加メンバーと共に大人の背中を見せることに徹しました。錦大沼の雄大な自然と希少な環境を子供達と体験し、日常の生活とかけ離れた空間を感じることで、苫小牧の可能性を再認識し自然の素晴らしさも感じる事が出来ました。

一年間を通して事業室を担い、多くの市民と接してきました。年当初に私が掲げた目標は多くの人と心のコミニュケーション持つことでした。振り返れば、私一人の力では多くの市民にこの気概を発信することは出来ませんでした｡しかし青年会議所活動を通し多くのＬＯＭメンバーに支えられる事により、年当初の目標を達成出来たと思っております。一年間、理事長方針を具現化するために身を粉にして事業に参加したメンバーには敬意表したいと思います。

組織改革会議　事業報告

組織改革会議
議　　長　神保　康弘

１年間を振り返って

組織改革会議は、会員に対する会員拡大の周知徹底と活動実施、そして公益法人改革に基づき監督官庁訪問と書類整備をおこない､同時に会員の青年会議諸活動に対する意識改革をおこなう責務を担った。

事業報告（もしくは委員会活動報告等）

１．連絡会議

会員全員が意識を持って会員拡張に取り組む”全員拡大”を目指し、各委員会の副委員長及び三役を集め連絡会議及びメール配信を開催し、意識改革と公益法人改革の準備を含め話し合いをおこなった。

また、意識改革を徹底するため、春先を中心に各委員会へ訪問をおこない、会員拡大を全員でおこなう必要性と公益法人改革についての説明会をおこなった。

２．会員拡大活動

会員全員に拡大活動を呼びかけ活動をおこなった結果、今年度に確定した新入会員は、７月入会１１名、８月入会１名であり、総会員数は１０８名（卒業扱いの直前理事長を含む）で２０１０年度を終了した。また、２０１１年１月新入会員の拡大活動と理事会承認をおこない次年度体制へ引き継いだ。

３．公益法人制度改革に基づく、法人移行活動

前年度よりの引継として公益社団法人移行を目指し､本年度より本格的に監督官庁との話し合い及び、定款変更作業を含める資料整備に入った。なお、上部団体である日本青年会議所が公益社団法人格を取得したため、こちらの調査（取得理由）を本年度に追加した。

１年間の反省及び今後の引継ぎ（もしくはまとめ等）

会員拡大については昨今の不況が尾を引き、昨年同様苦戦を強いられたが、後期は１２名の会員が入会する運びとなった。これは会員の努力の賜であるが、会員全員が強い意識をもって会員拡大に動いたとは言えない状況であった。会員拡張は会員全員が自分自信の事と認識して活動する必要が不可欠である。また、会員拡大も含めた意識改革は年度に関わらず常におこなっていかなければならない。

公益社団法人改革については、現段階では当会は公益社団法人に移行するのは厳しいことと、一般社団法人の運営の方が現状に即しているとの判断を監督官庁より受けている。移行期間は２０１３年であり、準備を含めると公益社団法人移行は大変厳しい状況である。よって、移行申請で込み合う前に一般社団法人へ移行し､会の体制を見直した上で改めて公益社団法人へ移行の可否を判断する事が望ましい。

会員拡大と公益法人改革に基づく法人移行を受け持ったが、どちらも大変厳しい運営を強いられる結果となった。どちらの事業も会員の多数の賛同を得られなくては為し得ない内容だが、会員に内容を十分に浸透させることが出来たかは疑問である｡意識改革の取り組みを更に強化する必要があると考える。

室長事業報告

総務室
室　長　先田　真知子

総　　論

本年総務室は、この１年間の各委員会が企画、運営をした多くの例会、事業を迅速にＬＯＭメンバーのみならず市民の皆様へ向けて多岐にわたり効果的に発信をして参りました。ＬＯＭにおけるポジションとしては裏方、若しくは黒子といった活動の割合が多くありますが、私自身が「総務ラインが存在しなければＬＯＭは成り立たない」と考えておりますので、今年度総務委員会のメンバーにおいてもそのプライドを持って１年間活動をして頂きました。詳細につきましては、総務委員長と重複してしまう部分がありますので要点を絞り、今後につなげて頂きたい点を述べさせて頂きます。

近年、いずれのＬＯＭにおいても抱えている課題として会員減少があります。この課題は単に志を共にし、自らを高めあう同士、仲間が減っていくという問題だけではなく諸活動における運営資金が足りなくなるという現実問題に直面します。その様な問題がある中で、総務として何が出来るのか今年度室長を担うにあたり逡巡をしたところ、総務が抱える事業項目については、例年作成している手帳、はすかっぷ発行などの印刷類の固定費が多い事に着目を致しました。この部分について、見直すべきところは無いだろうか、簡略化、効率化を図る事は出来ないだろうかと委員会と共に考えをめぐらせて、各事業においてＬＯＭホームページを活用する現在の形に収まる事ができました。未だ、アクセス数が然程多くは無い点、ＬＯＭメンバーへの浸透度など課題を多く残した部分もありますが、これまでの五十数年というＬＯＭにおける総務の活動の中で、これまでの歴史には無い一石を投じる事ができたのではないかと自負しております。今年度、ホームページが市民の皆様へ向けての私達の活動の紹介及び宣伝、またメンバーが自分達の活動を振り返るだけの媒体ではなく、メンバーが使用する事の出来るホームページへと変化を遂げる事が出来ました。

このように印刷等の固定費を削減する事により、各委員会が行う各活動へ寄与する事が出来、更に固定化していた総務活動の概念を進化する事ができたと考えます。次年度以降においてもルーティンワークとなっている総務活動は常に見直す事が必要であり、また時代に即した進化をこれからも常に求めなければならないと考えます。

総務委員会　事業報告

総務委員会
委 員 長　小川　和実

１年間を振り返って（もしくは委員会活動を通して等）

本年総務委員会は、ＬＯＭ全体の動きをメンバーに周知することはもとより、市民の皆様にも苫小牧青年会議所の活動が見えるよう心がけて活動して参りました。今年一年、各委員会が行った多くの例会、事業等の案内、報告を迅速にホームページに掲載し、活動写真においては４，５００枚以上の写真をホームページに掲載し、苫小牧青年会議所が行った活動を多くのメンバーや市民の方々に向けて発信して参りました。また、スムーズな組織運営、諸会議運営を行うために三役、各委員会との連携を図り、「縁の下の力持ち」というポジションを委員会メンバー全員がプライドを持って活動して参りました。

事業報告（もしくは委員会活動報告等）

１．諸会議の準備、設営、運営、議事録作成
　年間を通しての理事会（理事予定者会議４回、理事会２４回）の設営、議事録の作成。
　１月、７月、１２月の定時総会において案内の発送、設営、運営、議事録の作成。

２．青年会議所活動に関する情報の受発信、管理
　ＬＯＭホームページで今年行われた全ての例会、事業の案内、報告、また、各地域における様々な活動の情報発信。
　ＬＯＭ広報誌はすかっぷを年３回発行し、今年度の試みとして広報誌をホームページに掲載し、メンバーはもとよりＯＢ会員、来賓の方々また、市民の方々にも情報の発信を行いました。

３．要覧、会員名簿、事業報告書の作成
　要覧、会員名簿、事業報告書の作成を行い、関係各所に発送を行いました。

４．ＬＯＭアテンダンス管理
　例会前に、メールアテンダンスによる事前出欠管理を行い、例会、事業当日にはアテンダンス表を担当委員会に提出していただき管理を行いました。

５．アワード例会の企画、運営
　１１月１６日にアワード例会を開催し、今年行ってきた各委員会の活動を振り返り、今年一年間の活動が顕著と認められた委員会及びメンバーに対し褒章を授与致しました。最後には理事長より年間総評を頂きました。

１年間の反省及び今後の引継ぎ（もしくはまとめ等）

今年一年ＬＯＭの活動が円滑に進められるように裏方に徹して参りましたが、総務委員会としてＬＯＭ全体に一石を投じる攻めの試みも行って参りました。総務委員会の役割にはメンバー、委員会、そして市民を繋げる役割もあります。その為には、裏方に徹するだけでなく時には先頭に立って、ＬＯＭの活動を率先していくことがこれからは求められてきます。これからも続く活動を飛躍させるためにも、次年度総務委員会の皆様には攻めの総務委員会を実践していただきたいと思います。

室長事業報告

交流室
交流室長　松本　義孝

総　　論

２０１０年度、交流室では、理事長基本方針の中にある、青年会議所の仲間の下、会員相互や姉妹ＪＣとの親睦等の交流親睦の支援、公益制度改革に伴うＯＢとの交流事業の検証、ＬＯＭ事業費を使用しない事業立案を模索し活動して参りました。

まず、今年度交流委員会は、年当初から始まる事業である新年交礼会において、土屋理事長を来賓、ＯＢの方々にしっかりとお披露目し、一年間の我々の立ち向かうべき方針をしっかりとご披露していただけたと感じております。次に道南地域の会員交流の場、道南エリアスポーツ大会においては、ＬＯＭの結束力を高め、共に汗を流し励ましながらスポーツを通した一体感を得ることが出来たと思っております。ＯＢと現役の交流の場として大切な会、ＯＢ交流会においても、幕末の志士達をテーマとした会の設えに、ＯＢのお力を頂きながら共に進行を図り、次年度理事長の紹介や新三役等のお披露目にもたくさんの協力を頂き、支えを受けながらたくさんの事をメンバーや我々が得ることができました。最後に卒業式においては、これまで我々にたくさんのＪＣを、身を持って教え、伝えて頂いた今年度卒業生の皆様をしっかりと卒業して頂く為に委員会の枠を超えて多くのメンバーの協力を頂きながら記憶に残る思い出深い卒業式になったことと考えております。

室長方針に、友情と掲げ仲間の大切さと、多くの協力から得られる友情というものを委員長と委員会メンバーと共に、私自身がおしえられました。交流室に科せられた使命は、もちろん理事長方針でありますが、その芯となる部分にあるものそれが友情だと私は感じております。これまで、多くの諸先輩方が築いてこられたＪＣは人と人との繋がりや連鎖があって生まれたものと考えます。ならば、その連鎖の心こそ友情であり、仲間を思う友情の塊こそが一丸であるとも考えます。青山委員長の掲げたチーム苫小牧ＪＣの一丸の火種こそが、これかのＪＣ時代においても更に大切であり、又、大事に培っていかなくてはいけない、真となる部分であると考えております。今年度、土屋理事長から学ばせて頂いた「真」の部分から来年がはじまります。今年度の卒業生から姿を持って教えていただいた、最後のＪＣを我々、交流室にて、しっかりと残されたメンバーに友情の塊り一丸としてお伝えできたと確信しております。最後に、一年間を通して様々な事を学ばせて頂きました。改めて、皆で行うことの素晴らしさや、大切さ、そしてかけがえのない大事なものであるとの認識を頂いたことに、感謝をいたします。あと、色々とご迷惑を掛けた場面もありました、最後にお詫び申し上げ今年度の総論とさせて頂きます。

交流委員会事業報告

交流委員会
委 員 長　青山　直樹

１年間を振り返って（もしくは委員会活動を通して等）

今年度は（社）苫小牧青年会議所を「チーム」として考え、個々の活動や力は僅かであっても、メンバー全員が同じ目標に向かい「一丸」となることが、これからの活動に重要な要素であると考えておりましたので、そのような取り組みを行ってまいりました。反省すべき点もございますが一定の成果を残し、次年度へ繋がる活動が出来たと思っております。

事業報告（もしくは委員会活動報告等）

１．新年交礼会　　２０１０年1月１４日

２０１０年度（社）苫小牧青年会議所の最初の事業です。苫小牧角界の皆様、苫小牧青年会議所ＯＢの皆様、北海道内の青年会議所の皆様をお招きし、新年のお祝いを行うことと共に、この一年間（社）苫小牧青年会議所がどのように活動するかをＬＯＭ一丸となって示し、土屋英樹理事長をお披露目いたしました。

２．道南エリアスポーツ大会　森大会　２０１０年5月１５日、１６日

道南ＬＯＭとの交流、ＬＯＭ内の交流、士気を高めるために参画いたしました。
今年度においては森町へ向かうＬＯＭバスを運行し、車中はゲームなどを行って移動したため大変盛り上った親睦が出来ました。スポーツ大会での応援では全員が応援グッズを持って応援出来るよう準備をしたため、一番目立つ良い応援が出来たと感じております。

３．ＯＢ交流会　２０１０年7月２０日

ＯＢの皆様と交流することが目的であり、メンバーが何の縛りもなく交流できる年１回の会となります。また、次年度理事長のお披露目をすることも一つの目的となります。ＯＢの皆様のお出迎えから始まり、お見送りまでＬＯＭ一丸となって運営できました。

４.法被、のぼり作成事業

卒業生を華やかに送り出すために、法被とのぼりを作成し、北海道地区大会卒業式、（社）苫小牧青年会議所卒業式に使用しました。

５．卒業式　２０１０年１２月７日

今年度（社）苫小牧青年会議所卒業予定者が活動を終了するとなり、現役メンバーは今年度最後の事業となります。お世話になった卒業をＯＢの皆様と、ＬＯＭメンバーで盛大に送り出し、会の中では卒業生の青年会議所に対する想いを伝える演出も出来ました。残されたＬＯＭメンバーは今後の青年会議所活動の励みになった事業になりました。

１年間の反省及び今後の引継ぎ（もしくはまとめ等）

交流委員会の事業はすべて外に向けての事業となり運営はＬＯＭ全体を動かすこととなります。その上では各委員会の委員長にお願いすることも多く、各委員長の横のつながりを強く持つことが重要になります。また、ＬＯＭから発信する事業について注意を払わなくてはいけないのが、すべて当委員会や委員長がやりたいことやるのではなく、理事長、次年度理事長の想いを伝える部分やＬＯＭをどう発信したら効果的に対外に伝わるかなどしっかりと検証し何が一番大事かを見極め、運営サポートに徹することが重要となります。交流委員会活動は一年以上のロングランとなります。スタッフ、委員会メンバーには時間を割いてもらうことが多々ありますので、委員会の結束を強く持ちさらにＬＯＭメンバーへも感謝の念を常に持ちながら活動すべきであると気づかされた一年でありました。

室長事業報告

指導力室
室　長　吉本　一憲

総　　論

今年度、指導力室においては、企業の舵取り役として我々が、「真の指導者」となるために必要な企業経営力や人間力を身につける事を目標に一年間活動してまいりました。その目標を達成させるべく二つの事業と三つの例会を実施いたしました。まず、年間を通して行いました事業と致しまして、各例会の最後に実施した指導力開発プログラムと称する「三分間スピーチ」があります。この事業は、各委員会で選抜して頂いた発表者に自分を商品に例え、自己アピールすることでのスピーチ能力の向上と企業人としての成長を目的として実施いたしました。この事業を実施するにあたり、事前に三分間スピーチの発表者に対して、スピーチに対する心構えや、姿勢、またナンバリング、ラベリングといったスピーチするうえで重要な手法を委員会独自で組み立てた講習内容を基に出前講習という形で実施し、スピーチ担当者から高い評価を頂きました。また、三分間スピーチの評価をメンバーにしてもらいその結果をもとに、我々の委員会でのアドバイスも書き添えて評価表を作成し発表者に渡すことで、発表者のスピーチ力の更なる向上につながるものと考え実施いたしました。

二月に行いました（社）千歳青年会議所との合同例会におきまして、優れた指導者の一つの姿として、自らが先頭に立ち時代を見据え、部下を的確な方向へと牽引するために必要不可欠な要素が、指導者としての発想力とモチベーションの向上であると考え、「発想力で時代を見る」というテーマのもと夕張市ご出身の北川邦弘先輩にご講演頂きました。人生の終点を考え、そこから逆算して人生設計を立てる「発想力」と山あり谷ありの人生を乗り越えるために必要なモチベーションを向上する為の手法について教わり、指導者としていかに成長すべきかを学ぶ事ができる合同例会となりました。

六月の例会では、指導者として部下の個性を発揮させ、組織を発展させるためには、「コーチング」の手法を用いたコミュニケーション能力の向上が必要であり、一方的な「ティーチング」ではなく、部下に対して「聞く」「質問する」「承認する」という「コーチング」の三大手法を用いたコミュニケーションを行う事で、指導者と部下の双方向のコミュニケーションが生まれ、部下のモチベーションの向上に繋がり、結果として、企業経営を理想的な方向へと導くものになると考え実施いたしました。

九月の例会では、上記の二つの例会において養われた指導者としての「個」の技術を集結し「チーム」としてプロジェクトに挑む際の「目的と目標」を設定する事の重要性や、プロジェクトを合理的に進める上で必要な手法である「PLAN（計画）」、「DO（実行）」、「CHECK(評価)」、「ACT(改善)」（「PDCA」サイクル）の習得、さらに、「チーム」を持続する上で必要な「テクニカル・ライト・トレーニング」等のすぐに実践できるプログラムを実例を交えて紹介し、「個」の知識や技術では補うことのできない部分を補完し合う「チーム」の重要性を説いた例会となりました。

十月には、指導力室の最終事業として、第五十八代会頭　安里繁信直前会頭を講師にお招きし、「この時代を生きる指導者に何が必要か」というテーマで安里氏ご自身のどん底の時代から現在に至るまでの経験をもとに御講演頂きました。厳しい時代を生き抜く指導者として、知識や見識を身につける事だけではなく、人間としての徳を身につけることで信頼関係を築き、社会から認めてもらえるような指導者になるために大きな器を磨くことが必要であるとの言葉に、この一年間「真の指導者」とは何かを模索し活動して来た我々にとつて、一つの答えを見つける事ができた集大成の事業となりました。
この言葉を胸に、これからも「真の指導者」に成長すべく活動してまいりたいと思います。

委員会事業報告

指導力開発委員会
委 員 長　佐藤　元信

１年間を振り返って（もしくは委員会活動を通して等）

我々の委員会では、ＬＯＭメンバーが人を育てる力を身につけるために活動をしてきました。人を育てる力が企業の活力を生みだし、企業の活力が地域の発展に繋がり、地域の発展が国家の繁栄に繋がるというロジックから言えば、ひとづくりはまちづくりです。己に修練を課し、より優れた人間となることは自分の利益のためだけではなく、自分の力を人のために使える人間になるためだという確固たる信念を柱として、一年間の活動をしてまいりました。

事業報告（もしくは委員会活動報告等）

２月２５日、北川邦弘先生をお招きし、千歳ＪＣと合同で講師例会を行いました。テーマを『発想力で時代を見る』とし、指導者にとって不可欠である、時代を見据える力を養うための時間としました。講演の中では、脳内の地図を意識的に描き直すことで記憶さえもコントロールでき、人生をポジティブに変える手法や、逆算して人生計画を立てる出口戦略について教えていただきました。

６月２２日、コーチングをテーマに例会を行いました。青年会議所メンバーは若き経営者、若き指導者である事が多く、経験の足りなさを知識で補わなければなりません。一方的な押しつけ型の指導は部下の反発を買うばかりでなく、個性と考える力も奪ってしまいます。コーチングの手法を知る事で、部下に理想的なゴールをイメージさせ、モチベーションを高く保つ技術を身につけてもらいました。

９月２２日、チーム力をテーマに例会を行いました。時代が進むにつれ、あらゆる職種において専門的な知識が必要となっています。しかし一人が全ての知識を得るのは難しく、分野ごとのエキスパートが集まり、チームを組む必要があります。チームが生み出す相乗効果や、チームの目的と目標の設定の仕方、プロジェクトの進め方を知っていただき、各自の事業の発展に繋げて頂く事が出来ました。

１０月２９日、日本青年会議所の安里繁信直前会頭をお招きし、ご講演いただきました。テーマを『この時代に生きる指導者に何が必要か』とし、安里氏にはＪＣの枠を離れ、一人の超越した若き企業人という立場でご講演いただきました。地域の若き経済人たちと我々ＪＣメンバーが同じ場所、同じ時に新たな気づきを得る事で、今後の地域発展の礎を築く事が出来ました。

一年を通して、例会終了間際の時間で３分間スピーチを行いました。テーマを『自分を売り込もう』とし、自分自身を一つの商品に見立てて売り込んでもらいました。その結果、人前でスピーチする胆力とスピーチを組み立てる能力が備わったのと同時に、自分を客観的に評価することで今後の指導者としてあるべき姿を明確に認識していただく事がきました。また、スピーチ担当の委員会には事前に出前講習を行い、スピーチの組み立て方などについて学んでいただきました。

１年間の反省及び今後の引継ぎ（もしくはまとめ等）

我々の委員会の役割はＬＯＭメンバーの指導力の向上に他なりませんが、一年の活動を終えて一番成長できたのは我々の委員会メンバー自身でした。先の見えづらいこの時代、勢いに任せて突き進む事がためらわれがちになりますが、青年である今だからこそ、まずはやってみるという気概が必要であると思います。確固たる信念の基、多くのメンバーを巻き込んで、自らとＬＯＭメンバーがより優れた人間になれるような例会と事業の開催を、今後に期待します。

室長事業報告

地域政策室
室　長　廣澤　隆

総　　論

地方分権や市民自治等の観点から、昨年４月に自治基本条例及び住民参加条例が施行された事を受け、青年会議所活動の根幹とも言うべく、行政と市民の協働の架け橋、いわゆるシンクタンク的活動を主に１年間をかけ活動を推進いたしました。最も由々しき問題は、市民の行政や制度に対しての意識、いわゆる心が希薄かつ無関心であることが、青年会議所活動や様々な調査にて浮き彫りになっている現状を重く受け、その問題の本質や、解決策が何処にあるのかをしっかり調査分析し、運動展開の基礎を作っていきました。市民意識の積極的な変化を促し、市民参加を導くことが、今年度地域政策室設置意義と理解し、考えられる限りの様々な運動展開を行ないました。

本年度の特徴と致しまして、住民参加条例を基本とし、市民発信に強力に取り組みました。まずは、担当例会等にて我々自身が仕組みの内容や最大効果についての理解をしっかりと深め、今後の条例の動向や危険性についてもしっかり学び、その上で、市民への分かりやすい周知方法を考案し、積極的に発信することにより理解度は格段に深まったと考えます。その後、市民参加への具体的行動を促す活動を推し進めました。住民参加条例には幾つかの基本原則があり、その中の一つに先にも記載した通り「協働」があります。市民が市民参加の方法や効果を理解し、自発的に行政と目標を共有した上で行動することが、協働であり真の市民自治です。市民の目標が行政の考える目標と合致する為には、この「協働」に対する理解と心を養う事が急務であり、最も重要な要素です。より大きな協働の効果を産み出すためには、目標に向かう市民の意識レベルを上げる必要があることは言うまでもありません。我々は以前より「街はそこに住む人の意識以上にはならない」と謳ってきました。地域に住む者の心を養わなければいけないと考え、市民を巻き込んだ事業を画策し実行する事が出来た本年の活動は、心の育成に一定度の成果がありました。

具体的な活動に関しては、５月の担当例会にてメンバー向けの構成にて例会を企画運営いたしました。その中では多少危機感を煽るような内容に仕立て、興味を向けてもらう努力をし、「三無主義からの脱却」と銘打ち参加者それぞれの意識醸成に努めました。また、行政の根幹ともいえる、市議会の見学などを企画し、理事者を中心に参加を呼びかけ、現在の現状を知るべく市議会の傍聴を致しました。さらには、８月の担当例会はオープン例会とし、多くの一般参加者を募り、「今すぐ実行！市民参加のまちづくり」～物言えばこのマチは変わる～と題し、パネルディスカッション形式の例会を企画運営いたしました。この中では行政である市役所、各市民団体、市議会議員、青年会議所の代表を交え、熱く有意義な議論に参加者一同、意識と知識の更なる向上に一定の気付きがありました。また、近年の青年会議所が政策系の携わりを遂行するにあたり、市民意識不在と定義して活動してきましたが、その裏づけには確固たる物がなく、データ収集を取ってみても、必ずしも効率公平といえないものを枕に活動してきた現状を重く捉え、「まちづくりアンケート」の事業を実施いたしました。これは行政である苫小牧市役所に共催をいただき、住民基本台帳にて無作為に抽出された３０歳から４０歳の男女を対象にして行なわれた事業です。実施後に検証活動を行い、報告書をとりまとめ、それぞれ各種関係機関に配布する事業を報道機関にも取り上げていただき、大変有意義かつ効果的な活動だった事は勿論、今後の青年会議所活動の礎になるしっかりとしたデータを残す事が出来ました。

１年間果敢に活動した事により、我々も含め、苫小牧に住む一人ひとりが、地域社会に関わる実感を持ち未来に満ち溢れた苫小牧が達成されました。

地域政策委員会事業報告

地域政策委員会
委 員 長　鎌田　孝幸

１年間を振り返って

今年度我々地域政策委員会では、過去２年に亘り取り上げて来ました「市民参加条例」の更なる推進を主軸に置き、会員の市政への意識向上と無関心な市民を市政に向けさせること、こうして育まれた個人の意見が結び合うことにより大きな力そして声へとなる「まちづくりはひとづくり」の理念の下、市民と市政の協働となるべく活動を進めました。委員会三役ともに政策委員会の経験が皆無な為、勉強を進めながら全てのことを手探りで行ってきました。今この報告書を作成するにあたり振り返ってみますと長いようで短い一年でありました。

例会、事業報告

１、５月第１例会では、市政への市民参加や住民投票制度についての基本事項を復習すると同時に、政策提言、パブリックコメントの現状を紹介しました。また、他市町村での住民投票実施事例を紹介、住民投票の可能性と問題点を紹介した。市民が成熟しない段階で市民参加がどんどん進み、一応の完成が間近であること、ただ制度に参加することでは無く制度をつくる段階からの参加が市民参加であること、市民の先頭を切ってメンバーが市政からの呼びかけに応じ積極的に参加していけば、やがては市民が成熟し活発な参加へとつながり、多くの議論の衝突が更なる明るく豊かなまちづくりへとつながっていく旨を伝えました。

２、６月には市民自治に関する意識調査「まちづくりアンケート」事業を実施しました。

苫小牧市の協力により３０歳から４０歳までの苫小牧市民１，０００名の名簿を無作為抽出方法で出力頂き発送いたしました、結果は１７０名の返送となりました。回答率は低い結果と当委員会では認識しておりますが、苫小牧青年会議所が不特定多数の方に本アンケートを発送すること、８月の担当例会の案内を合わせて行うことによって、対象の市民に市民自治への関心を向けること、また、苫小牧青年会議所の活動への関心を向けることが出来たと確信します。

本アンケートの集計によって、市民参加条例の名前の知名度は意外に低くは無いということ、苫小牧市民は市民活動を通しての市民参加ということへ対し意欲的な部分があるということ、またそういう場所を提供されれば積極的な参加もありうるということが確認できました。

３、８月第１例会では、オープン例会とし、先ずまちづくりアンケート集計結果分析を踏まえた委員会プレゼンテーションを行い、次にその知見を基に諸関係団体よりお招き致しました方々とパネルディスカッションを行いました。主な議題は以下の通りです。

・まちづくりアンケート回収率に対しての見解
・市民参加条例に対する一般市民の認知度とその理由
・市民参加条例推進や市民生活を活性化していくための意見

これらの問題に対して、各パネラーから様々な意見や主張が延べられ、ディスカッション参加者だけではなく会場全体で「まちづくり」について考える時間を共有することができました。

４、１１月にはまちづくりアンケート結果報告書作成並びに配布事業を実施し、合計３２部を作成、保存用の３部除き２９部を関係各所に直接お届けし、市民の皆様の目に触れられる様に設置いただくことをお願いし、収蔵いただきました。

この報告書が多くの市民の皆様の目に触れ、皆が市民活動を含む市民参加と市政に対し関心を持つことができたならば、必ずや、苫小牧市が更に明るい豊かな社会へと発展するものと確信します。

苫小牧青年会議所のみならず、市民ひとりひとりに至るまでが本報告書やデータを自由に閲覧し、参考資料として有効に活用していただくことにより、必ずや自治基本条例と市民参加条例の認知度は更に高まり、市民活動をふくむ市政への市民参加の関心度は増していくものと確信します。

５、前年の年末には市役所市民自治推進課主催の「住民投票条例を考えるワークショップ」に委員会スタッフで参加をし、まちづくりを深く考える他の団体や個人と活発に議論を交わし、多くの意見に触れることが出来ました。この経験は委員会スタッフにとりまして大変貴重なものとなり、本年の活動の精神的な支柱となったと思います。

また、理事者向けに市議会の見学会を実施し、市民の先頭に立ってまちづくりを推し進めている青年会議所会員が、こうした市議会見学を含めた様々な場所場面に率先して足を運ぶことの重要性を再確認していただけたものと考えております。

１年間の反省及び今後の引継ぎ

本年の我々の活動は「身近な問題を改善でき魅力あるまちづくりができる事を広く発信する」という目標につきましては、完全なる達成とまでは残念ながら至りませんでした。これは委員会の年間活動計画の見通しが甘かったと云えます。私個人の事情により、年末年始に委員会スタッフを含めた委員会メンバーと綿密な打合せを進められなかった経緯によるものです。この場を借りまして、スタッフ始め委員会メンバーの皆様にお詫びを申し上げます。

今後も苫小牧青年会議所において地域政策に関する活動は続けられるものと思います。政策となると誰しも難しく受け止めようとしますが、施策論・方法論はあくまでも道筋の一つであって、大道は一本であり、それは精神論「郷土愛」であると考えます。様々な施策を取り扱うことも重要ですが、会議所会員が郷土愛をもって夫々に市民活動に参加する様に仕向けることや、子供向けに情報発信を行うなど目線を変えた活動をも展開し、効果的な方法を模索する必要があります。苫小牧青年会議所＝スケートまつりのボブスレー・・・という図式から、会員自身が積極的にアクションを起し、郷土を愛する後進を育てることにより、まちづくりのトップランナー「苫小牧青年会議所」と市民から評価を頂ける様に活動を更に推し進めていただきたく思います。

最後に、この１年間を共に頑張りぬいていただきました委員会スタッフ・メンバーに心からの感謝を添えまして、活動報告の結びといたします。

室長事業報告

広域政策室
室長　尾崎　真吾

総　　論

本年度、広域政策委員会を担当する広域政策室として、経済情勢の厳しい中にあって我々の目標である明るい豊かな社会を実現すべく、苫小牧という地域枠、団体にとらわれることなく近郊地域、他団体との積極的な連携関係の構築によってより良い地域、苫小牧を創造するため活動してまいりました。

具体的には広域政策委員会が行なう例会により、新北海道総合計画を鑑み道央広域連携のビジョンの考察すること、苫小牧を含む東胆振を中心とした近郊地域での連携の可能性を検証すると共に、その連携が互いの独自性を損なわずに長所を効果的に利用し、短所を補完していく関係が成立した場合の優位性及び有効性を近郊地域市民のみならず関係諸団体に発信していきました。更に各種マスメディアの協力を得て例会参加者という限定的な範囲ではなく広く不特定多数の市民に対して我々の活動の内容、意義を発信しました。

また、例会で構築された近郊諸団体との連携関係を基に実践的な事業を展開しました。これは現在の情報化社会の中にあって自治体間、地域間及び各団体間での連携が行なわれ有意義な結果が得られた事例、また成功している地域、団体が存在している事実を確認することは困難なことではありません。しかし、当該市を含めて近郊地域での実施された事例はわずかであります。これは目的、効果に偏りがある、参加団体が対等な関係を構築していない、広報・宣伝の不足等の様々要因が挙げられます。このような現状を踏まえて苫小牧青年会議所のポテンシャル、広域政策委員会の能力を最大限に発揮することで連携事業の企画・運営は可能であると考え実施すべく委員会をサポートしてまいりました。

一年の活動を終えて、各方面の団体が連携の必要性は理解しているものの各々がイニシアティブをとりリーダーシップを発揮することへのためらい、地域、団体間のベクトルに若干の相違があること等を認識しました。しかし同時に委員会を通じ事業を実施することで魅力あるまちづくりを行なう青年会議所の担う新たな形と役割を発見することが出来ました。市内及び近郊地域の持つ潜在的な魅力と既存の枠組みに囚われない多彩な組合せを用いて継続性のある連携を行なうシステムの構築の必要性について感じた一年でありました。

委員会事業報告

広域政策委員会
委 員 長　星野　岳夫

１年間を振り返って

「相互理解から生まれる心の連携」をテーマとして苫小牧近郊地域における広域政策を考察しました。新・北海道総合計画の第４章地域づくりの基本方向に記載されている「広域的、多層的な連携・相互補完のあり方」等を参考とし、広域市町村圏としての東胆振に着目しました。そして、民間団体だからこそ可能となる、人と人とが主役になる志を持った人間同士の連携を模索し、二回の例会を通じ、厚真町、安平町、白老町、むかわ町の商工会青年部との青年団体連携を構築しました。更に、机上の空論に終わらせる事なく、具体的な広域連携活動を実施し、地域住民が自ら動き出したくなる様な住民参加型の事業を展開しました。

事業報告

１．３月第一例会：利他のこころ～近郊地域の元気から苫小牧の未来が創造される～
地域、団体の垣根を越えた青年団体による広域連携を模索する為、共に学び共に考え、方向性を共有する事を目的とし、東胆振の各商工会青年部及び関係諸団体の皆様に参加頂きました。前半では、苫小牧観光協会ご協力の下に実施した最新のアンケート調査結果を用い、東胆振における広域連携に関する可能性を示しました。後半では、札幌国際大学の吉岡宏高教授に、これまでの実績や経験を踏まえた広域連携の実例に関しご講演頂きました。具体的なデータや実例を学ぶ事で今後に繋がる気づきを共有する事が出来ました。
２．７月第一例会：相互理解から生まれる心の連携～真の広域連携への一歩を踏み出そう！！～
各青年団体メンバーと関係諸団体の皆様全員が交流を深めると同時に、自ら考え自ら一歩を踏み出す事を目的として開催しました。当委員会より３月第一例会以降の取組を発表した後、各青年団体代表をパネリストとしたパネルディスカッションを会場の皆様にも参加頂く形で行いました。パネリストの皆様は元より、会場の皆様にも非常に活発な議論をして頂き、広域連携に関し具体的な多数のアイディア、意見を頂く事が出来ました。
３．ぐるとマップ事業
～ぐるっと巡ってグルメも楽しむ、とまこまい近郊でとまろうマップホームページ～
苫小牧近郊地域の各種情報を有効に発信するべくホームページを立ち上げました。苫小牧市役所からの距離、近郊地域の市町村、食べる、観る等のジャンルで各種情報を検索する事が出来ます。ユーザー登録する事で自らお勧めスポットを書き込む事が出来る機能を付加した事により、情報数、アクセス数共に順調に増加し、約４ヶ月で６万ＰＶ（ページビュー）を超えるアクセス数を実現する事が出来ました。
４．広域連携コーディネート事業～東胆振鉄道遺産メモリアルツアー～
安平町と苫小牧市の各種団体がお互いに連携し各々が前向きに行動頂けるようサポートする事で、広域連携事業を実現する事が出来ました。又、道央地域観光戦略会議が主催する「炭鉄港２０１０　北の近代三都物語」の１事業として参画する事により、道央地域全体に向け東胆振の宝を発信する事が出来ました。札幌市、岩見沢市、室蘭市、函館市、当別町、ニセコ町、東京都等からも多数の参加を頂き好評を博す事が出来ました。
５．２０１０東胆振秋のスイーツスタンプラリー
東胆振の青年団体による広域連携の集大成として共催事業を実施しました。多くの人々に参加頂き、札幌、千歳、美唄、登別、室蘭、由仁等からも多数の応募を頂く事が出来ました。東胆振の魅力を広い範

囲に発信する事が出来たのと同時に、東胆振内の相互交流を含む交流人口増進を具現化する事が出来ました。又、各観光協会より観光マップを数百部ずつ提供頂き参加店に設置した事や、上記３の「ぐるとマップ」と連動させた事等により、スイーツ以外にも、現地に行かなければ感じる事の出来ない様々な魅力を伝える事が出来ました。

まとめ

１年を通して青年団体による東胆振連携を構築し、実際に活動を行う中で広域連携の有効性や可能性を実感する事が出来ました。東胆振の中核都市としての苫小牧市を考える時、つい上からの目線で連携活動を行おうとしてしまいますが、人と人との繋がりが基本であり、まちの規模に囚われる事のない、同じ目線での繋がりでなければ相乗効果を生む広域連携は実現しないものと考えます。リーダーとなるべき苫小牧だからこそ利他のこころで取り組む必要があります。「まず相手を理解してから自分を理解してもらう」「まず相手の地域を理解してから自分の地域を理解してもらう」と言う考えの下、苫小牧が行動を起こし、お互いを理解する事が出来た時に初めて真の東胆振連携が生まれ、更に広い地域との連携へと発展していくものと考えます。

室長事業報告

地　域　活　力　室
室　長　島崎　克志

総　　論

今年度は、苫小牧市内にて協働で身近に出来る事を探し、その取り組みを大切しながら活動を終える事ができました。大枠の活動の一つとして、地域に活力を発信するために、苫小牧で代表的な多くの人が集まるスケートまつり、港まつり事業に注目し、市民一人ひとりが活力溢れるようなまちになってほしいと言う願いを胸に参画しました。スケートまつり参画の企画の内容としては、今後の苫小牧の活力の原動力となる子供たちに喜びや感動を生涯忘れることのない思い出として与えたいという思いから、冬季ならではの雪合戦大会や雪を使用した大型の滑り台、若者のパワーが大事な人力ボブスレー等を、港まつりでは動物園や水鉄砲大会等を実施しました。会場にて喜ぶ子供たちの様子から足を運んでいただいた多くの人に、感動を感じていただけたと同時に、苫小牧に大切な活力を伝えることが出来たと考えます。又、もう一つの活動のとして、苫小牧の子供達に多様な体験を積ませ、その体験を通じた課題に対し、よりよく問題を解決する能力を子供たちに身につけてほしいという願いで、子供たちの更なる生きる力の育成を図る事を大切にする事業を、苫小牧のアルテンにて小学生を対象とし１泊２日で実施しました。企画の内容としては、アルテン周辺の自然散策や、カレー等の野外における食事作り、星空観察、工作体験、宿泊体験等を実施しました。事業を通して、今の子供達に自然体験が不足している事実や、その体験過程で発生する課題がいかに子供たちに大切であることの事実を学んだと同時に、保護者の皆さんの感想や、事業当日の発表会、各プログラムに参加する子供達の表情を見る限り、子供たち､そして私たち親世代の生きる力の創造に向けた一助になったと考えます｡以上の活動を通じ、これからの地域のあり方に大切である、市民であることが誇りに思えるまちのために身近にできることから取り組んでゆくこと、ここに住む全ての人が活力に大切な逞しいひとを目指すことの大切さを実感できました。今後、一連の取り組みが、更なる多くの苫小牧人によって取り組まれ、苫小牧の活力に大切な生き甲斐と幸せを感じ、生涯を安心して過ごせる地域に向けた一助になることを切に願い報告とします。

委員会事業報告

地域力委員会
委 員 長　矢木　拓郎

１年間を振り返って（もしくは委員会活動を通して等）

「活力の発信」を方針の下に、1 年間の活動を振り返ってみると、２つのおまつり事業参画という形で、街にかかわり活動をしてまいりました。運営では、大きな事故、怪我等無くスムーズに運営することが出来たのは、委員会メンバーをはじめ、ＬＯＭメンバーの多大なるご協力があってのことだと感じました。

また、今年は雪合戦や動物園など新しい形でのお祭りを企画提案でき、次世代を担う子供たちに喜びと感動､生涯記憶に残る思い出を与えることが出来たお祭り事業であったと自負しております｡そして、市民に対しての活力発信、委員会メンバーの団結力と友情を深めることが出来たのが、私の最大の成果だと考ええます。

事業報告（もしくは委員会活動報告等）

１．スケートまつり参画事業においては、例年のボブスレーと小学生チーム対抗の雪合戦大会を行いました。スタジアム形式の雪合戦コートは子供たちの白熱した試合もさることながら、親も巻き込み大変盛り上がりのある大会となりました。さらには５人１組チームを組んでいただきましたが、チーム力で得られる感動や団結力にも繋がったと確信します。スケートボブスレーではＬＯＭメンバーが１つになり、子どもたちの笑顔を身近で感じながら、汗を流し全力で押させていただきました。例年の通り楽しみに待っている子どもの、順番待ちの行列が絶えない状況でした。

２．港まつり参画事業においては、ふれあい体験型の動物園と、小学生チーム対抗水鉄砲大会を行いました。ふれあい体験動物園では、子どもたちが普段ふれあうことの出来ない動物に「えさやり体験」「写真撮影」と通じ、ひと夏の心に残る思いでなった企画でだと確信しております。
また、小学生対抗の水鉄砲大会では、元気いっぱいの子どもたちが勝利を向かい真剣に試合に参加していました。子どもだけではなく、応援に来られた親も一緒に盛り上がりことが出来た、大変活気ある大会となりました。

１年間の反省及び今後の引継ぎ（もしくはまとめ等）

今年１年間、委員会メンバーと様々な議論をして、活動した結果、私自身の活力にも繋がり、多くのことに気づかされ、学ばさせていただきました。ＪＣでなければこのような経験は決して出来なかったと思いますし、何より委員会メンバーに、支えられ協力していただきながら事業を運営する中で、本当の友情を育めたと考えます。

生涯学習委員会　事業報告

生涯学習委員会
委 員 長　相馬　司

１年間を振り返って

本年度、生涯学習委員会では運営方針として「生きる力」の育成を掲げてまいりました。子供達の成長に大切な生きる力を、私達地域の大人が背中を示して育ませようと考えたからです。その為にまず私達が手本となる背中を学び、実践する。この学びと実践の繰り返しが私達を真の大人の背中へと導くものと考えました。私達の姿勢が他の市民に伝わり共感を得る事で、共に背中を示す人の輪が広がれば、この街は子供達が元気で過ごせる「真苫小牧」になると思い１年間委員会メンバーと共に運動してまいりました。

事業報告（もしくは委員会活動報告等）

1. ４月第一例会の企画及び運営

例会テーマ　大人が変れば子供も変る。学ぼう大人の背中。子供達のためにJAYCEEがすべきこと。

本例会は今一度JAYCEEが大人の背中を学び、日々の行動で実践してほしいと考え開催いたしました。なぜなら、背中で子供に生きる力を育ませる大人が少なくなってきているからこそ、JAYCEEが地域の大人として率先して背中を見せる事が大切であると考えたからです。私達が学んだ背中を実践する事で大人の背中が子供達の生きる力の育成に必要である事を他の地域の大人に伝える事で意識変え、背中を示す大人を増やす事が目的だからです。例会で学んだことは全て当たり前の事であり、本気で実践し続けることでこの背中は他の大人に伝わり意識が変る、だから、まずJAYCEEから実践しましょう、とメンバーに行動を促すことができました。

2. ８月青少年育成事業の企画及び運営

事業テーマ　多様な体験が生きる力を育ませる。大人の背中の実践。

本事業では「チャレンジ探検隊」～つくろう友達・学ぼう自然・歩いてみようinアルテン～と題してオートリゾートアルテンと錦大沼公園で小学生30名とLOM会員56名講師４名の計90名でキャンプを実施しました。今、子供達に不足している様々な自然体験・生活体験・社会体験を経験出来る機会を設けることは、地域の大人が地域の子供達の為に出来る事だと考えたからです。事業当日は天候にも恵まれ、また大きな事故もなく二日間を無事に過ごすことが出来ました。泣き出したり、わがままを言う子供達を班長がまとめくれたことで最後まで脱落者がなく事業達成できたことは、大人の背中を実践できたからだと思います。多くの子供達と共に過ごした経験は参加したメンバーの大人の背中の更なる向上に寄与したと思います。また、今の子供達に不足している様々な体験を積ませ、その過程で発生する課題に自ら解決することで生きる力を育んで貰うという今回の目的は事業最後の発表会や各プログラムに参加する子供達の表情を見る限り達成されたと考えます。

１年間の反省及び今後の引継ぎ

私達が背中を学び実践することで、子供達に生きる力を育ませる事までは実施することが出来たと思いますが､他の大人を巻き込んで共に背中を示す人の輪が広がったかと言うと若干弱かったと感じます。例会・事業を実践するにあたり、JC以外の地域の大人と関っていく事は重要だと思いますし、その為にも私達自身常に学び・自己を律し続ける姿勢が大切だと思います。

アカデミー塾事業報告

アカデミー塾
塾　長　　竹越　昌彦

１年間を振り返って（もしくは委員会活動を通して等）

私は卒業の年である１年間、アカデミー塾生と共に過ごす機会を与えて頂きました。青年会議所に在籍し社会貢献の枠組みの中、活動を行う過程で修練と奉仕の心を継続させるには、仲間の存在が不可欠である事を先輩達から教わり、入会間もない会員にこの事を伝えるべく塾長という職務を受けさせて頂きました。

塾生達は、私を青年会議所の先生の様に慕い敬って頂き、そんな教え子たちを卒業しても責任を持って支え続け、見守る事が出来る塾長という役職に誇りを感じ、仲間の尊さを塾生から更に学ぶ事が出来たこの１年間は、私にとって心に残る大切なものとなりました。

事業報告（もしくは委員会活動報告等）

１．６月、第一例会では、小さな力が沢山集まる事によって大きな力を発揮する、その大きな力を持ってすれば出来ない事などはない。しかし、大きな力を得る為には個々が団結する必要があり、団結力を継続させるには、強い絆が無くてはなりません。メンバーが一つの目的に向かい困難を乗り越えながら絆を深めて頂くための例会を企画、運営致しました。

２．１０月、第一例会では、青年会議所に対し、塾生の入会当初の気持ちを素直な視点から発表して頂き、月日を重ね徐々に変化する塾生の心の動きから、メンバーに初心を思い出して頂き、今後の団体の可能性を再度見つめ直す例会を企画、運営致しました。この団体が持つ可能性は無限であります。メンバーひとり一人の絆を強固に出来て初めて大きな力となって、無限の可能性を秘めた団体へと成長するのです。アカデミー塾自らが見本となり絆を強固に出来た１年でした。

１年間の反省及び今後の引継ぎ（もしくはまとめ等）

青年会議所に入会し最初の配属となるアカデミー塾は、新入会員にとって特別な場所であったと振り返ります。塾に関わって頂いた副塾長、幹事、スタッフの方々は入会年数が長く、多くの経験を積んでおり言動と行動は、新入会員の見本となる人物に相応しく力強いメンバーでした。塾生にとって見るもの聞くもの全てに疑問を感じますが、的確な対応に安心感を与え活動に不安を覚える事無く導き、塾生とスタッフは信頼し合い、強い絆で結ばれていく時間を過ごして参りました。

塾生と関わるスタッフに必要な事とは、芯のある心だと結論付けます。導く者として、ぶれる事無く塾生と向き合う事が望まれ、今後の青年会議所活動を行う上でもっとも影響を与える機関がアカデミー塾であり、芯のあるＪＡＹＣＥＥとなった経験豊富な方々にアカデミー塾を運営して頂きたいと考えます。

日本ＪＣ・北海道地区協議会　出向事業報告

公益社団法人日本青年会議所北海道ブロック協議会
会　長　　髙橋　憲司

１年間を振り返って（もしくは委員会活動を通して等）

本会のブロック会長会議や北海道地区協議会の会員会議所会議等を通じて、全道全国のメンバーと直接お話をさせて頂く機会を多く頂戴した一年でありました。そして、特にブロック会長公式訪問を実施するにあたって、各地域のまちの状況を実際に見て肌で感じ、会員会議所の現況や抱えている悩み、そして地区協議会や本会へのご意見等、本音で理事長の皆様と語り合いたく５０ＬＯＭ全てを訪問させていただく手法をとりました。また、頂戴した意見を各エリア運営にも役立てるべく、エリア担当副会長にも同伴をお願いいたしました。結果、全道各地域を回り北海道経済の低迷と地域の現状を目の当たりにいたしました。訪問した地域の多くは、シャッターが閉まっている店が多くあり、活気が少なく、人口減、少子高齢化がそれに輪をかけている状況は北海道全体に共通しています。そのような状況下で各理事長の皆様の悩みは、会員の減少であり、メンバーのモチベーションの低下や景気が良い時からの継続事業でありました。また、多くの理事長を含むメンバーの企業の業績が好ましくなく、ＪＣ運動に費やす時間や資金の工夫にも相当なご苦労が見受けられました。

事業報告（もしくは委員会活動報告等）

１．会員拡大におけるＬＯＭ状況課題把握およびメンバーの意識調査、拡大ツールの情報発信、および３０％会員拡大の推進
２．アカデミー事業・研修事業の実施
３．ＬＯＭサービスおよび協働運動の実施とトレーナー養成の推進
４．責任の伴う発展に向けた世界を建設する機会への参画（ＪＣＩ世界会議大阪大会への参加）
５．ＪＣＩ　Ｎｏｔｈｉｇ　Ｂｕｔ　Ｎｅｔｓキャンペーンの推進
６．新公益法人制度施行に伴うＬＯＭへの支援
７．全国一斉国民参加型憲法タウンミーティングの開催
８．第２２回参議院議員通常選挙および首長選挙におけるマニフェスト型公開討論会・検証大会の開催
９．日本ＪＣ、地区協議会と連携した領土・領海問題の国民意識醸成と署名運動の推進
10．民間初の救援相互協定の締結

１年間の反省及び今後の引継ぎ（もしくはまとめ等）

北海道各地域において我々青年会議所メンバーこそが、この北海道の状況を打破し変えうる組織である事を痛感し、また、我々が、各地域において先達が築いてくれたＪＣの存在感を生かし、覚悟をもって地域のビジョンを発信し、それに向かい運動展開を図る事が必要であると確信いたしました。北海道地区協議会は、そのＬＯＭの運動を支え、北海道全体をまとめながら北海道をカウンターパートナーとしてＬＯＭ協働しながら運動を展開していく使命を担います。本年の地区協議会の活動、運動を通じて、「日本青年会議所本会や北海道地区協議会が身近に感じていただける様になった」との言葉を多くの理事長より頂戴いたしました。しかし、まだ「身近に感じていただける様になった」だけで、次年度以降も、そのスタンスを継続し、ＬＯＭの運動を支え各地会員会議所に理解を頂きながら、この北海道に「更なる光を」与え続けていく組織として進化を続けなければいけません。そして、我々は日本人として、日本青年会議所と共にそのガバナンスを通じて組織力を生かし、日本の抱える諸問題に対し、各々が意識と責任を持って行動を起こすことが何より必要であると考えます。

出向者事業報告

公益社団法人日本青年会議所　国民意識確立グループ
７０８ＬＯＭサービス実践特別委員会
第３小委員会（ＪＣＩセミナー担当）
委　　員　笹嶋　隆廣

１年間を振り返って

２０００年の入会以来トレーナー資格をとるまで活動していましたが、ここ数年この世界から遠ざかっておりました。昨年秋にこの委員会より声をかけて頂き、ブロック会長の推薦を受けて出向することになり、多くのトレーナー仲間と再会、出会いがあり、ＪＣＩ公認プログラムの実施とトレーナー養成を中心に各種プログラムに参加するなど、大きな刺激を受け、貴重な一年を過ごすことができました。

事業報告（もしくは委員会活動報告等）

１．ＪＣＩ公認プログラム等の実施とトレーナー養成

京都会議から始まった、各種セミナーショーケース、ＪＣＩプレゼンターコース、ＪＣＩトレーナーコース、ＪＣＩ－ＣＳＲを中心に、ＶＭＶなど各種セミナーの開催と、ＬＯＭ単位での開催支援とトレーナー派遣。特にＪＣＩプレゼンターコースに関しては、日本ＪＣは世界で最大数の開催数と、受講者数を誇ることになり、５００名以上のトレーナーの卵を排出することになりました。

私は、奈良ブロック大和郡山ＪＣにてＪＣＩプレゼンターコースとＪＣＩ－ＣＳＲを、ＪＣＩトレーナーコースを大阪にて受講すると共に、姫路ＪＣと横浜サマコンでのＪＣＩプレゼンターコースのアシスタントトレーナーとして参加してきました。北海道地区協議会主催のＪＣＩトレーナーコースにも参加することになり、久しぶりにトレーナーの世界に足を踏み入れる一年となりました。

２．ＪＣＩ公認トレーナー認定システムの翻訳

英語版のＪＣＩトレーナー関連資料をトレーナーとしての経験を基に、日本ＪＣのメンバーがわかりやすく翻訳し、日本のライブラリーに残すことで今後の資料として活動できるようにしました。

１年間の反省及び今後の引継ぎ（もしくはまとめ等）

一年を通じ、各種トレーナー派遣とトレーナー養成をメインに活動しましたが、年間で３００回以上各種セミナーを開催、トレーナー派遣をすることになりました。北海道地区協議会とも連動し活動していくはずでしたが、北海道地区でのニーズがほとんど無く、道北エリアで行われたＪＣＩプレゼンターコースを一度、ＪＣＩトレーナーコースを一度しか開催できていないことが悔やまれます。また、今年度最後に２名のＪＣＩプレゼンターコースの公認トレーナーが誕生しましたが、現役メンバーにヘッドトレーナーがいなかったのも現実で、シニアトレーナーに日本中を飛び回って頂くというのも現実でした。身近なところで道内のトレーナー資格保有者対象にＶＭＶのトレーナー養成も予定しましたが、残念ながら参加希望者が少なく開催できておりません。北海道地区各ＬＯＭにニーズが無いのか、知られていないのかを各ＬＯＭに問い合わせて今後の北海道地区のニーズを少しでも増やすべく活動するべきでした。私は次年度も同委員会に出向することになったので、北海道地区でのニーズを高めてから卒業したいと考えております。今後、セミナー等の開催の声があれば一言声をかけて頂きたいと思います。

出向者事業報告

公益社団法人日本青年会議所
総務グループ拡大委員会
委員　松本　英久

１年間を振り返って（もしくは委員会活動を通して等）

北海道ブロック代表推薦を頂き、北海道地区協議会ＪＣ未来創造委員会と連動する、総務グループ拡大委員会に出向させていただきました。各地会員会議所においても、会員拡大は大きな問題となっており、総勢９６名の委員会となりました。本年拡大委員会は『すべてはＬＯＭのために』をスローガンにかかげ、３０％会員拡大、４５，０００人必達を目標に活動し、京都会議での拡大セミナーから始まり、サマコン、全国大会、世界大会全てにおいて拡大セミナーを開催し、会員拡大を促してまいりました。それと同時に全国４７ブロック訪問を行い、様々な会員拡大の成功例やポイントなどを説明し、各ＬＯＭの会員拡大支援を行ってまいりました。

事業報告（もしくは委員会活動報告等）

１．会員拡大パンフレット、拡大リーフレット、拡大リストの作成及びホームページ掲載
２．京都会議、サマーコンファレンス、全国大会、世界大会での拡大セミナー実施
３．全国４７ブロック訪問による、会員拡大プログラムの発信
４．拡大例会等の講師派遣

第１回拡大委員会　全体会議　２０１０年１月２２日（金）　京都
第２回拡大委員会　全体会議　２０１０年２月１３日（土）　土浦
第３回拡大委員会　全体会議　２０１０年３月２０日（土）　東京
第４回拡大委員会　全体会議　２０１０年４月１７日（土）　東京
第５回拡大委員会　全体会議　２０１０年５月１５日（土）　郡山
第６回拡大委員会　全体会議　２０１０年６月１９日（土）　東京
第７回拡大委員会　全体会議　２０１０年７月２３日（金）　横浜
第８回拡大委員会　全体会議　２０１０年９月１１日（土）　茨城
第９回拡大委員会　全体会議　２０１０年１０月１日（金）　小田原
第１０回拡大委員会　全体会議　２０１０年１１月６日（土）　京都

１年間の反省及び今後の引継ぎ（もしくはまとめ等）

北海道地区協議会と日本と同時出向ということもあり、日本の情報を早く地区に届ける事もでき、また、北海道にも何度か委員長を例会講師としてお招きする事もできた。日本の役割としては、いかに地区やブロック、各地会員会議所にうまく利用していただくかだと思っている。日本には様々な情報やツールがあるので、それらを効果的、効率的に発信し利用してもらう事で各地会員会議所の活動もスムーズになると思います。
初の日本出向であったが、様々な刺激を受ける事となり、出向させて頂いた事に感謝申し上げます。

出向者事業報告

公益社団法人日本青年会議所　北海道地区協議会
50LOM 連携推進室 JC 未来創造委員会
委 員 長　廣澤　隆
幹事　佐々木　亮輔　委員　大槻　卓矢
委員　松本　英久　　委員　蓑島　徹矢

１年間を振り返って

本年度、当委員会では北海道民としてのアイデンティティの確立を目的とした地域に必要とされるニューリーダー育成事業の実施、ＪＣＩトレーニングプログラムの普及とＪＣＩトレーナーの養成や様々な研修事業を通し、心あるひとづくりに主眼においた人材育成を推進して参りました。会員拡大においては会員拡大ツールの情報発信は勿論のこと、北海道各地青年会議所が抱える会員拡大についての諸問題をヒアリングし、その解決に向けた事業を開催し拡大活動に対し積極的な支援を行って参りました。

事業報告

１．ニューリーダー育成及び研修事業の実施
・ニューリーダー育成事業ＩＮ旭川　（４月２４日、２５日）
北海道各地青年会議所理事長から推薦された各ＬＯＭ１名を参加対象者として実施
・２０１０年度本次年度理事長研修ＩＮ留萌（９月１０日）
北海道各地青年会議所理事長及び次年度理事長予定者を対象に組織や運動の課題を共有しそれを解消するためのあるべき姿について共通認識を高めてもらうことを目的に開催。

２．ＪＣＩトレーニングプログラムの普及とトレーナー養成の推進
・ＪＣＩ公認プログラム「ＪＣＩプレゼンター」の開催及び各ＬＯＭでの開催支援。苫小牧開催を含め北海道では本年３回開催され３６名のメンバーが受講。更に、ＪＣＩプレゼンターの次のステップであるＪＣＩトレーナーコースを７月３日、４日登別において２３名の参加者（受講者８名）で開催。

３．会員拡大におけるＬＯＭ状況課題把握、およびメンバーの意識調査、拡大ツールの情報発信、３０％会員拡大の推進
・会員拡大懇話会ＩＮ北見（４月１１日）
北海道各地青年会議所理事長及び各ＬＯＭの会員拡大担当者を対象に実施。
・毎月各ＬＯＭの新入会員数を集計し伝達。３０％会員拡大推進に向けて意識醸成。

４．責任を伴う発展に向けた世界を建設する機会への参画推進
本年度ＪＣＩ世界会議が大阪で開催されるにあたり、各ＬＯＭに対し大会概要の伝達や参加者数の随時集計等の参加推進活動の実施。

１年間の反省及び今後の引継ぎ

１年間の活動を通してＪＡＹＣＥＥが地域のリーダーとして立つ為に有用なプログラムや会員拡大の必要性や各ＬＯＭの課題を互いに共有しそれらを克服するために必要なハード・ソフトを共に発信して参りました。事業特性から時間的拘束を伴うものが多く、開催予定日の都合をヒアリングして可能な限り多くの方に受講してもらえるようなスケジュール設定が必要であると考えます。

出向者事業報告

公益社団法人日本青年会議所北海道地区協議会
地域のたから創造委員会
喜多　新二　亀谷　太郎　坪田　一史

１年間を振り返って（もしくは委員会活動を通して等）

北海道における地域資源を活かし、且つ他産業への波及効果も高い観光産業を主要産業として捉えることが、今後の北海道経済の維持・発展に繋がり観光の推進には「地域のたから」を創造する事を目的とした活動を行いました。様々な模索があったものの、独自性を出した事業や発信には至らず、講師を招いてのフォーラム開催と地区大会での観光ワールドカフェの開催など、観光事業関係者に委ねた形の事業開催に終わりました。観光を主要産業に取り入れる取組みをされている様々な団体や著名者の方々の協力なしに委員会活動は出来ない訳ですが、それを加味した形で独自の政策を唱えられるようになるためには、1年間という限られた中では限界を感じました。

委員会運営では、観光産業をマクロ的に捉えた方向性からミクロ的に的を絞りきれなかったため、地区大会やフォーラムでも、ハッキリとしたコンセプトを道民に打ち出しきれてなかった。事業開催における芯の部分をしっかりと詰めて、明確な発信に務めるべきだと感じました。

最後にいろいろと反省する事はあったものの、亀谷くん、坪田くんと共に最後のＪＣ生活の１年間を支えて頂いた事に心から感謝を述べて事業報告とさせて頂きます。

事業報告（もしくは委員会活動報告等）

１．4 月 11 日　北見市　「地域のたから」創造セミナー開催
　テーマ「観光まちづくりの秘訣！」
　講師　北海道大学　観光学高等研究センター教授　敷田　麻美氏
　パネラー　（株）カルナ　代表取締役　小畑　友理香氏
　　社団法人　北見青年会議所　理事長　塚原　徹君

２．北海道地区大会　留萌大会　観光ワールドカフェの開催

３．全国大会及び世界大会での特産品ブースの出展

１年間の反省及び今後の引継ぎ（もしくはまとめ等）

今後、政策系委員会においては北海道地区協議会のトップが明確な知識を持って方向性を示さないといけないと思います。地域主権や観光などもそうですが、入り口論を繰り返すばかりの事業発信が続いている現状から脱却するには、具体論を唱えられるだけの勉強をしないと、この手の委員会は作られても大した事はできないと思います。次年度地区会長の高橋　憲司くんには、組織運営だけでなく本来の街づくりに主眼をおいて頑張ってもらいたいと思います。

出向者事業報告

公益社団法人日本青年会議所　北海道地区協議会
広報渉外委員会
委員　久保　真一
委員　谷島　和治
委員　大滝　力緒

作成者　大滝　力緒

１年間を振り返って（もしくは委員会活動を通して等）

本年度広報渉外委員会に初出向させていただき１年間活動してまいりました。初対面から他ＬＯＭメンバーとの強烈な出会いに始まった１年でしたが、北海道地区協議会のホームページの作成・日本ＪＣアテンド業務などの活動を通じてＬＯＭを越えた連帯感・一体感が生まれ、安藤委員長を初めとするスタッフの牽引により大変有意義な１年間を送らせていただくことができました。今後も機会を与えていただけるなら自己啓発のためにも出向させていただきたいと考えております。

事業報告（もしくは委員会活動報告等）

１．北海道地区協議会ホームページ作成・更新・管理

北海道地区協議会の情報発信窓口として協議会の事業・各ＬＯＭの運動や事業を各青年会議所メンバーはもとより北海道民の皆様に活動の魅力を余すことなく伝わるように行ってまいりました。

２．アテンド業務関連

各地区での事業における役員アテンド・スケジュール管理などスムーズな役員の移動・日本ＪＣとの密な連携・連絡調整を行い無駄のない渉外活動を心がけて行ってまいりました。

３．各種懇親会関連

各種会議・事業終了後の懇親会等の設営・運営を行い、企画・設営・進行等の業務を担当し、参加メンバーの交流を深めることを一番に考え活動してまいりました。

１年間の反省及び今後の引継ぎ（もしくはまとめ等）

活動の中でもホームページのより有効的な活用方法の検討（更新回数・アクセス数の増加）が今後の課題だと個人的主観では思います。今後としては、各ＬＯＭまた北海道民への積極的な広報活動などが必要と考えます。

出向者事業報告

公益社団法人日本青年会議所　北海道地区協議会
総務運営委員会
委　員　山本　康二
委　員　片岡　圭介

１年間を振り返って

今年度の活動に関しては、あらためてメンバーに対するケアや意識が必要だと感じた一年でありました。諸会議参加アナウンスについても会議案内が統括幹事から来るだけで、集合時間や役割等が何も示されず、各エリア幹事とのコンタクトを取る事は一度もありませんでした。委員長からのお礼メール等もさほど無く、自身の心境報告にお礼文がある程度のものでした。それらに対し改善要求をしたにもかかわらず何も変わらずに経過していた為参加をする事ができませんでした。どのような状況であっても参加をする事が義務的な要因はあると思いますが、やはり人は感情を先行して活動するものである為ここで示す参加意欲をわかす配慮がより活発な活動につながるものだと感じました。

事業報告

１．北海道地区協議会諸会議の設営及び議事録作成

２．ＨＰ管理

１年間の反省及び今後の引継ぎ

反省としては、上記で示すどのような状況であっても積極的参加を行い、メンバーの一員としてより正しい道へと導く事が長く活動をしている者としての役割だと反省します。活動に対する妥協がなく自分としての意見を発信し続けることができていれば一年の活動内容は自身だけではなく大きく変わっていたと思います。それを踏まえ来年度に関しても総務委員会へ幹事として出向する為、今年度自分が感じた要因を生かし、参加して頂くメンバーがより気持ちよく積極的に協力頂けるように発信をし続けたいと思います。

出向者事業報告

公益社団法人日本青年会議所　北海道地区協議会
道南エリア運営会議
議員　阿部　和法

１年間を振り返って（もしくは委員会活動を通して等）

本会議体は、道南エリアの運営を主としています、その他の大きな役割として、エリア内の人材育成に関わる研修事業がありました。いわゆるアカデミー塾です。ここで、様々な塾生に出会うことができて、色々と学ぶ機会を得られることが出来ました。青年会議所に入会して５年目になる私ですが、塾生と触れ合うことによって、初心を思い出すことができ、有意義な時間を過ごすことが出来ました。

また、道南エリア運営会議に出向しているメンバーも、魅力のある人が多く研鑽することが出来ました。各エリア会議や塾会議、そして、道南エリア大会の運営にあたり、様々な地域から出向しているメンバーと関わることで、自らを見つめ直す機会も生まれました。また、道南エリア大会の一事業において、司会を任され、大変貴重な体験もさせていただくことができました。

この会議体で得られたことは、今後の青年会議所活動はもちろんのこと、これからの私の人生においても必ずや必要不可欠だったものになると思っております。

事業報告（もしくは委員会活動報告等）

１．北海道ブロック協議会道南エリアの運営

道南エリア会議の運営サポートを行いました。また、道南エリアスポーツ大会においては、森青年会議所と連携をしました。また、道南エリア大会においては、元プロボクサーの坂本博之氏をお招きして、講演をいただく事業を行いました。

２．エリア内各地会員会議所における日本 JC が推進する運動の連携及び情報の受発信等

日本 JC が推進する運動の情報発信をエリア会議などで行いました。

３．会員拡大における LOM 状況課題把握、拡大ツールの情報発信、および３０％会員拡大の推進

LOM 状況などは把握致しました。

４．エリア内の人材育成に関わる研修事業の企画・運営

アカデミー塾会議を、４度に行いました。

５．エリア内の会員相互理解に関わる事業の企画・運営

道南エリアスポーツ大会および、道南エリア大会において事業発表会や懇親会などを企画し、会員相互理解に関わる事業を行いました。

１年間の反省及び今後の引継ぎ（もしくはまとめ等）

様々なエリア会議、アカデミー塾に参加させていただきましたが、より多くのアカデミー塾生との交流があればよかったと思います。また、アカデミー塾生の参加者の出席率が少ないことがあったので、アカデミー塾の重要性を知らせる必要があると感じました。また、例年通りのスポーツ大会、エリア大会のほかに、さらなる事業があっても、良いのではないでしょうか。

出向者事業報告

公益社団法人日本青年会議所　北海道地区協議会
ＬＯＭ連携実践委員会
委　　員　田中　雄太
委　　員　忠鉢　高志
委　　員　中原　光晴
委　　員　松井　光宏
委　　員　松本　義孝

作成者　田中　雄太

１年間を振り返って

今年度、北海道地区協議会ＬＯＭ連携実践委員会に出向して、1年間活動をしてきました。

地区出向の話が有った時は、入会して日が浅くＪＣの基本がよくわかっていない私にとって「出向はさすがにちょっと無理かな？」と正直感じました。結局は、あまり深く考えないで「何事も経験！」と割り切って安易に出向をお引き受けしたのですが、ＬＯＭ同様、この委員会においても、貴重な経験を積むことができ、今となっては「良い選択をしたな」と心から思っています。

この委員会は、エリアの枠を超えたＬＯＭ同士の連携を促進することを目的とし、主に、救援相互協定の締結への活動などを行いました。最初は何をしているのかがよくわからなかったのですが、庄司委員長をはじめ、スタッフおよびメンバーの皆様が暖かくサポートをして下さり、ＬＯＭ同士の連携が如何に重要かということを感じながら、活動に参加することができました。

このような有意義な委員会に、私に出向する機会を与えてくださったＬＯＭの皆様に心から感謝を申し上げます。

委員会活動報告

主な活動内容は以下のとおりです。

1．北海道における民間初の救援相互協定に向けた現状調査および救済相互協定の締結
2．ＪＣＩ　Ｎｏｔｈｉｎｇ　Ｂｕｔ　Ｎｅｔｓキャンペーンの推進
3．４７ブロック協議会会頭訪問および理事長懇談会の設営

１年間の反省及び今後の引継ぎ

今更言うまでもないことですが、青年会議所が基盤を置いている「地域」は離れ小島ではなく、密接にリンクした存在です。広大な北海道では距離の壁があり、遠隔地同士のアクセスは容易ではありませんが、距離を超越した連帯感を感じることができるのが地区協議会出向の良さだと感じました。

また、同じ青年会議所でもＬＯＭによって人のあり方や考え方に様座な相違点や個性があることもわかりました。これらが融合して形成される北海道地区協議会の活動に参加し、その片鱗を感じられたのは非常に貴重な経験となりました。もう少し私にＪＣの経験が多くあれば、より一層充実した活動ができたと思いますが、それを補ってあまりある経験ができたので、満足しています。

少子高齢化社会を迎える中で地域の過疎化が進行することはほぼ確実です。生産年齢人口の減少とともにまちづくりの担い手も減少することが予想されます。この観点からも、各ＬＯＭが活発な連携と情報共有を行いつつＪＣ運動に取組むのは有意義でかつ必然の流れだと思います。今後とも苫小牧ＪＣから地区への積極的な参加をしていただけることを期待しています。

《同　好　会》
◎じゃがいもクラブ
◎アイスホッケー同好会
◎ボウリング会議所
◎サッカー同好会

理事会構成者数

顧問	2
直前	1
三役	6
四役	8
監事	3
委員長	10
出向	6
計	36

理事者	30

※は理事者　30名（出向理事含む）
〇印は組織改革会議への出向者

メンバー総数 108

総　会

顧　問
岩村　孝徳
高橋　憲司

監　事
神田　英俊
久保　真一
鷹松　英樹

理事会

直前理事長
上田　弘政

理事長
土屋　英樹 ※

専務理事
伊部　尚宏 ※

事務局職員
村井　祐子

副理事長
米田　嘉慎 ※

- **総務室**　先田　真知子 ※
  - 総務委員会
    - 委員長　小川　和実 ※
    - 副委員長　大蔵　省悟 〇
    - 幹事　倉根　弘幸
    - 牛抱　忍
    - 岡田　圭正
    - 小野　昌人
    - 亀谷　太郎
    - 髙田　泰彦
    - 藤田　玲大奈
    - 山本　英誠
- **交流室**　松本　義孝 ※
  - 交流委員会
    - 青山　直樹 ※
    - 廣島　貴典 〇
    - 大槻　卓矢
    - 阿部　健二
    - 大平　敏子
    - 高橋　幸久
    - 竹内　和峰 ※
    - 松本　英久 ※
    - 山本　康二
    - 吉川　学

副理事長
笹嶋　隆廣 ※

- **指導力室**　吉本　一憲 ※
  - 指導力開発委員会
    - 佐藤　元信 ※
    - 忠鉢　髙志 〇
    - 菅野　拓哉
    - 秋山　直人
    - 下川原　賢
    - 棚澤　政人
    - 千田　明 ※
    - 蔦森　宣克
    - 苫米地　亮介
    - 矢農　誠

副理事長
藤田　健次郎 ※

- **地域政策室**　廣澤　隆 ※
  - 地域政策委員会
    - 鎌田　孝幸 ※
    - 田中　雄太 〇
    - 佐藤　章一
    - 五十嵐　靖二
    - 岸本　憲宜
    - 黒瀧　優一
    - 佐賀　隆敏
    - 城岡　崇宏
    - 松井　光宏
- **広域政策室**　尾崎　真吾 ※
  - 広域政策委員会
    - 星野　岳夫 ※
    - 大滝　力緒 〇
    - 阿部　和法
    - 金久　徹
    - 喜多　新二 ※
    - 久保田　順司
    - 坪田　一史
    - 村越　邦彦

副理事長
矢部　大観 ※

- **地域活力室**　島崎　克志 ※
  - 地域力委員会
    - 矢木　拓郎 ※
    - 若松　隆徳 〇
    - 簑島　徹矢
    - 東　孝宣
    - 逢坂　清志
    - 大関　正芳
    - 大西　奏介
    - 佐々木　亮輔 ※
    - 丹野　善尚
    - 松田　隆幸
    - 山縣　直行
  - 生涯学習委員会
    - 相馬　司 ※
    - 下山　貴人 〇
    - 中原　光晴
    - 浅野　和人
    - 笹川　雅之
    - 城　巌
    - 其田　浩二
    - 谷島　和治
    - 中井　明仁
    - 野表　広和
    - 三角　千大

組織改革会議　議長
神保　康弘 ※

- 副議長
  - 阿部　栄一郎 ※
  - 丹治　有貴 ※
  - スタッフ
  - 牧田　秀崇
  - 三役役員
  - 各委員会からの副委員長出向者

アカデミー塾　塾長
竹越　昌彦 ※

- 副塾長
  - 藤　淳一 ※
  - 幹事
  - 片岡　圭介 ※
  - スタッフ
  - 乾　哲也
  - 佐藤　瑞輝
  - 後期新入会員
  - 阿部　利満
  - 石田　義人
  - 大友　尚
  - 小金澤　昇平
  - 田中　克和
  - 錦戸　大輔
  - 畑屋　学
  - 日沼　直竹
  - 不川　順詞
  - 藤田　淳子
  - 藤原　剣哉
  - 吉川　肇

入会資格審査構成員

議　　長	神保　康弘君
副理事長	米田　嘉慎君
副理事長	笹嶋　隆廣君
副理事長	藤田　健次郎君
副理事長	矢部　大観君

理事長選挙管理委員会

委 員 長	佐賀　隆敏君
委　　員	牛抱　忍　君
委　　員	下山　貴人君
委　　員	其田　浩二君

褒章審査構成員

理 事 長	土屋　英樹君
監　　事	神田　英俊君
監　　事	久保　真一君
監　　事	鷹松　英樹君
専務理事	伊部　尚宏君
顧　　問	岩村　孝徳君
顧　　問	髙橋　憲司君
直前理事長	上田　弘政君

２０１０年度（社）苫小牧青年会議所　ＡＷＡＲＤ（褒章）

【委員会賞】

●最優秀委員会賞
　広域政策委員会

●理事長特別賞
　交流委員会

●優秀委員会賞
　指導力開発委員会
　地域力委員会

【Ｊａｙｃｅｅ賞】

●最優秀Ｊａｙｃｅｅ賞
　阿部和法　君
（広域政策委員会）

●理事長特別賞
　佐々木亮輔　君（地域力委員会）

●優秀Ｊａｙｃｅｅ賞
　大槻卓矢　君（交流委員会）
　若松隆徳　君（地域力委員会）

【新人賞】

●最優秀新人賞
　佐藤章一　君（地域政策委員会）

●優秀新人賞
　大滝力緒　君（会員交流委員会）
　中原光晴　君（生涯学習委員会）

【例会１００％出席者】

土屋英樹	岩村孝徳	伊部尚宏	米田嘉慎	笹嶋隆廣	藤田健次郎	矢部大観
吉本一憲	廣澤　隆	島崎克志	神保康弘	竹越昌彦	小川和実	大槻卓矢
吉川　学	佐藤元信	忠鉢髙志	菅野拓哉	秋山直人	苫米地亮介	鎌田孝幸
佐藤章一	城岡崇宏	星野岳夫	大滝力緒	阿部和法	金久　徹	喜多新二
久保田順司	坪田一史	村越邦彦	矢木拓郎	山縣直行	相馬　司	石田義人
大友　尚	小金沢昇平	日沼直竹	不川順司	藤原剣哉		

【アテンダンス込・例会１００％出席者】

髙橋憲司	神田英俊	久保真一	上田弘政	先田真知子	松本義孝	尾崎真吾
倉根弘幸	牛抱　忍	岡田圭正	小野昌人	青山直樹	廣島貴典	大平敏子
山本康二	阿部健二	下川原　賢	矢農　誠	田中雄太	若松隆徳	蓑島徹也
大関正芳	大西奏介	佐々木亮輔	下山貴人	中原光晴	谷島和治	中井明仁
丹治有貴	藤　淳一	乾　哲也	阿部利満	田中克和	錦戸大輔	

2010年度　決算(案)

収 入 の 部

款	項	目	決算	12月修正予算	増減	備考
会費収入			14,074,500	14,074,500	0	
	年会費		12,614,500	12,614,500	0	会員数95名×125,000円＋7月入会11名×62,500＋8月入会1名×52,000円
	終身会費		760,000	760,000	0	卒業生19名×40,000円
	JC基金繰入金		130,000	130,000	0	新入会員13名×10,000円(前期2名、後期11名)
	入会金		390,000	390,000	0	新入会員13名×30,000円(前期2名、後期11名)
	理事会費		180,000	180,000	0	理事会出席者 36名 ×5,000円
事業収入			582,000	582,000	0	
	登録料		582,000	582,000	0	
		港まつり	220,000	220,000	0	港まつり入場料
		広域連携事業	117,000	117,000	0	広域連携事業参加料
		チャレンジ探検隊	45,000	45,000	0	チャレンジ探検隊参加料
		OB会	200,000	200,000	0	世界会議登録料
	負担金	他LOM事業負担金	0	0	0	
補助金収入			1,330,000	1,330,000	0	
		スケートまつり	600,000	600,000	0	
		港まつり	600,000	600,000	0	
		広域連携事業	50,000	50,000	0	広域連携事業補助金
		広域連携事業	80,000	80,000	0	スタンプラリー事業補助金　見込
雑収入			745,887	745,887	0	
	事務委託料		690,000	690,000	0	
		NZ協会事務受託料	120,000	120,000	0	
		OB会事務受託料	500,000	500,000	0	
		同好会事務受託料	70,000	70,000	0	
	雑収入		55,887	55,887	0	
		雑収入	55,887	55,887	0	LOMカード等の手数料
繰越金			756,098	756,098	0	
合　計			17,488,485	17,488,485	0	

支 出 の 部

款	項	目	決算	12月修正	増減	備考
負担金			1,708,335	1,711,335	−3,000	
	日本		1,250,835	1,253,835	−3,000	
	青年会議所	基本金	75,000	75,000	0	
		付加金	505,000	505,000	0	1名5,000円×95名＋1名2,500円×12名
		JCI会費	115,560	115,560	0	1名1,080円×107名
		国際協力資金	195,275	195,275	0	1名1,825円×107名
		機関紙購読料	300,000	303,000	−3,000	1名3,000円×95名＋1名1,250円×12名
		出向者負担金	60,000	60,000	0	1名20,000円×3名
	北海道地区		457,500	457,500	0	
		基本金	30,000	30,000	0	本年度より増額
	協議会	付加金	427,500	427,500	0	1名4,500円×95名
運営費			4,672,678	4,800,000	−127,322	
	事務局費		4,672,678	4,800,000	−127,322	
事業費			9,241,508	9,359,612	−118,104	
	総務室		1,107,834	1,168,194	−60,360	
	交流室		892,070	949,564	−57,494	
	指導力室		182,171	182,171	0	
	地域政策室		199,084	199,084	0	
	広域政策室		546,680	546,680	0	登録料・補助金収入　247,000円
	地域活力室		2,199,563	2,199,563	0	登録料収入　45,000円
	組織改革会議		0	0	0	
	アカデミー塾		245,916	245,916	0	
	ネットワーク交流事業		2,450,000	2,450,000	0	OB会世界会議登録料
	その他事業費		84,000	84,250	−250	
	例会費		1,334,190	1,334,190	0	
JC基金繰入支出金			130,000	130,000	0	新入会員13名×10,000円(前期2名、後期11名)
特別基金繰入支出金			126,145	126,145	0	年会費収入の1%
繰越金			1,609,819	1,361,393	248,426	
合　計			17,488,485	17,488,485	0	

参考：総予算に占める
事業費の比率　52.84%

事業費内訳

単位:円

款	項	目	決算	12月修正	増減	備考
事業費			9,241,508	9,359,612	−118,104	
	総務室		1,107,834	1,168,194	−60,360	
		総務委員会	1,107,834	1,168,194	−60,360	
	交流室		892,070	949,564	−57,494	
		交流委員会	892,070	949,564	−57,494	
	指導力室		182,171	182,171	0	
		指導力開発委員会	182,171	182,171	0	
	地域政策室		199,084	199,084	0	
		地域政策委員会	199,084	199,084	0	
	広域政策室		546,680	546,680	0	
		広域政策委員会	546,680	546,680	0	登録料・補助金収入　247,000円
	地域活力室		2,199,563	2,199,563	0	
		地域力委員会	1,639,694	1,639,694	0	
		生涯学習委員会	559,869	559,869	0	登録料収入　45,000円
	組織改革会議		0	0	0	
		組織改革会議	0	0	0	
	塾		245,916	245,916	0	
		アカデミー塾	245,916	245,916	0	
	ネットワーク交流事業		2,450,000	2,450,000	0	OB会世界会議登録料
	その他事業		84,000	84,250	−250	
	例会費		1,334,190	1,334,190	0	

基金会計

収入の部　　単位:円

款	項	目	決算	12月修正	増減	備考
基金			8,284,533	8,284,533	0	
一般会計繰入金			130,000	130,000	0	新入会員13名
雑収入			7,456	7,456	0	利息(前年決算20,335)
合計			8,421,989	8,421,989	0	

支出の部

款	項	目	決算	12月修正	増減	備考
基金積立預金支出			0	0	0	
合計			0	0	0	

収支合計			8,421,989	8,421,989	0	

特別基金会計

収入の部　　単位:円

款	項	目	決算	12月修正	増減	備考
特別基金			126,869	126,869	0	
一般会計繰入金			126,145	126,145	0	年会費収入の1%
雑収入			114	114	0	利息(前年決算606)
合計			253,128	253,128	0	

支出の部

款	項	目	決算	12月修正	増減	備考
特別基金積立預金支出			0	0	0	
合計			0	0	0	

款	項	目	決算	12月修正	増減	備考
収支合計			253,128	253,128	0	

会計監査報告書

２０１１年１月２４日、（社）苫小牧青年会議所事務局に於いて、２０１０年度分の諸帳簿関係書類を監査した結果、適正且つ正確に記載されている事を認め、ここに報告いたします。

２０１１年１月２４日

監　事　　神　田　英　俊

監　事　　久　保　真　一

監　事　　鷹　松　英　樹